タイトル	アウグスト・ベーク 『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』：翻訳・註解(その6)
著者	安酸, 敏眞; YASUKATA, Toshimasa
引用	北海学園大学人文論集(55): 39-102
発行日	2013-08-31

アウグスト・ベーク
『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』
— 翻訳・註解（その6）—

安 酸 敏 眞

第二部 批判の理論

§ 27. 文献

フランキス・ロポルテルス〔フランチェスコ・ロポルテロ〕『古い書物を修正する術ないし原則についての議論』¹。これはグルテルス『リベラル・アーツの灯火ないし松明』² 第二部にも再録されている。—カスパー・スキオピウス『批判の技術について、およびとりわけその第二の部分たる校訂者について』³。—ユリウス・スカリガー『批判の技術について。』⁴（四折版）—これらの著作は批判の職人的なことを与えるに過ぎない。ヨハンネス・クレリクスの『ラテン語、ギリシア語、ヘブル語の研究への道がそこにおいて開かれる批判の技術』⁵ はより大きな要求を掲げる。クレリクスは

¹ Francesco Robortello, *De arte sive ratione corrigendi antiquorum libros disputatio*. Padua 1557 u. ö.

² Janus Gruterus, *Lampas s. fax liberalium atrium*. Lucca 1747.

³ Caspar Schoppe, *de arte critica et praecipue de altera ejus parte emendatrice, quaenam ratio in debeat; commentariolus in quo nonnulla nove emendantur, alia prius emendata confirmantur* (Nürnberg 1597 und öfter, zuletzt Leyden 1778).

⁴ Joseph Justus Scaliger, *de arte critica diatriba*, ed. Joachim Morsius (Leyden, 1619).

⁵ Johannes Clericus, *Ars critica, in qua ad studia linguarum Latinae, Graecae et Hebraicae via munitur: veterumque emendandorum, spuriorum*

あらゆることについて何かを知っていたが、しかし多くは知らなかった。彼自身の批判はその行使において出来が悪く惨めである。上記の書物の第1巻は本来的に古代の著作家の読解と解釈学的なことに関する方法的教説を含んでおり、第2巻は改訂的な批判および本物と偽物の批判を含んでおり、第3巻は実践的な諸規則、つまり「批判の技術の使用がそこにおいて示される批判的かつ教会的な文書」(epistolae criticae et ecclesiasticae, in quibus ostenditur usus artis criticae) を含んでいる。そのなかには多くの間違いがある。いかなる明瞭な体系も見出されず、個々の点ではしばしば非常に表面的な見解が散見されるが、とはいえ長所も少なからずある。— P・ブルマンヌスによって編集された著書『校訂』⁶に収録されているヘンリクス・ヴァレンシウスの「批判について」。— ホイマン『批判の技術についての論考』⁷。— ジャン・バティスト・モレル『批判の諸要素』⁸は、教会教父からの事例を挙げつつ、またその言葉や文字が取り違えられる件に関して教示しつつ、ラテン語写本の間違いを改良することにのみ踏み込んでい。エルフェニヒ『言語的批判の技術の諸規則の概略。キケローの『神々の本性について』第1巻112-20の練習問題つき』⁹。これは見解の独創性はなく、表面的で、才気にかける。クリスティアン・ダーニエル・ベック『歴史的・批判的考察あるいは批判的、積義的、歴史的蓋然性について』¹⁰、

scriptorum a genuinis dignoscendorum et judicandi de eorum libris ratio traditur (Amsterdam, 1696-1700 u. ö).

⁶ Henricus Valensius (Henri de Valois), *Emendationes*, herausgegeben von P. Burmannus (Amsterdam, 1740).

⁷ Christoph August Heumann, *Commentatio de arte critica* mit Robortello's Abhandlung *de arte critica* (Nürnberg und Altdorf, 1747).

⁸ Jean Baptiste Morel, *Eléments de critique* (Paris: Herissant Fils, 1766).

⁹ Peter Joseph Elvenich, *Adumbratio legum artis criticae verbalis cum exercitationibus criticis in Cic. de nat. deorum I, 112-20* (Bonn: Carl vom Bruck, 1821).

¹⁰ Christian Daniel Beck, *Observationes historicae et criticae sive de*

第4分冊(事例集)。— シュライアーマッハー『文献学的批判の概念と区分について』¹¹(1830年のベルリンアカデミー論文)。— シューバルト『古文学学的批判の方法論についての断片』¹²。— [フリードリヒ・ハイムゼート『批判的な事柄において不可欠な用心, 忍耐, および大胆についての論考』¹³。— J・N・マズヴィク『推定に基づく批判の技法の輪郭』¹⁴。— ヴィルヘルム・フロイント『文献学の3年間』¹⁵。— フランツ・ビューヘラー『文献学的批判』¹⁶(学長講演)。— ヘルマン・ハーゲン『批評家に向けての歩み』¹⁷(文献学セミナー生のためまた自習用に立案されたもの。)] これ以外にも、多くの批判的著作, 版, および他の書物において、批判の理論はときおり触れられている。

probabilitate critica, exegetica, historica. 4 Abhandlungen (Leipzig: Staritiuss, 1821-26).

- ¹¹ Friedrich Schleiermacher, „Über Begriff und einteilung der philologischen Kritik (30. März 1830),“ in: KGA I. Abt. Band 11, *Akademievorträge* (Berlin: Walter de Gruyter, 2002), 643-656.
- ¹² Johann Heinrich Christian Schubart, *Bruchstücke zu einer Methodologie der diplomatischen Kritik* (Kassel: Verlag von Oswald Bertram, 1855).
- ¹³ Friedruch Heimsoeth, *Commentatio de necessaria in re critica vigilantia, perseverantia atque audacia* (Bonn: Georgi, 1869).
- ¹⁴ Johan Nicolai Madvig, *Adversaria critica ad scriptores Graecos et Latinos*, Bd. 1: *Artis criticae conjecturalis adumbratio* (Kopenhagen: Gyldendaliansae, 1871), 8-184.
- ¹⁵ Wilhelm Freund, *Triennium philologicum oder Grundzüge der philologischen Wissenschaften für Jünger der Philologie zur Wiederholung und Selbstprüfung*, 4. Abschn (Leipzig: Wilhelm Violet, 1874; 2. Aufl. 1879).
- ¹⁶ Franz Bücheler, *Philologische Kritik* (Bonn: Verlag von Max Cohen & Sohn, 1878).
- ¹⁷ Hermann Hagen, *Gradus ad criticen: Für philologische Seminarier und zum Selbstgebrauch* (Leipzig, 1879).

批判は、われわれの説明(原著77頁)に従えば、対象が自己自身からあるいは自己自身のためにではなく、他の者との関わりならびに関係を確定するために理解されるべきであるような、そのような文献学的機能なので、この関わりを認識すること自体が目的である。このことは批判という名前によってもまた暗示される。κρίνεινの根本的意義は分離すること(Scheiden)と選別すること(Sondern)である。しかしすべての分離することおよび選別することは、2つの対象の間の一定の関係を確定することである。そのような関係を明言することは判断(Urtheil)である。判断すること(urtheilen)はたしかに取り出して分与すること(heraustheilen)であり、それは決定を下すこと(entscheiden)の同義語である。

下された判断がいかなる性質のものであるかは、批判の概念にとってはまったくどうでもよい。しかし判断の無限の可能性は批判的活動の目的によって制限される。伝達されたものとその諸条件との関係を理解すること、そのみが肝要であり得る。さて、解釈学は伝達されたもの自体をこうした諸条件から解釈するので、批判は解釈学と同一の種類に分かれなければならない(原著83頁を見よ)。それゆえ、文法的、歴史的、個人的、および種類の批判が存在する。そして批判的活動のこれら4つの種類は、それに対応する解釈学的機能と同じように、当然密接に結びつけられなければならない。伝達されたものは伝達の諸条件から生じてくるので、これらの諸条件は伝達されたものにとっての尺度である。ところで、伝達されたものは諸条件に対して二重の関係をもち得る。それはそれらに適合的であるのか、あるいはそうではないのか。つまり、それらのうちに潜んでいる尺度と合致するのか、あるいはそれから逸脱するのか。さらにもし伝達が古い著作のように伝承によって受け継がれるのであれば、批判は同時にこの伝承に対するその関わりを調べる必要がある。伝達されたものは破壊する自然的影響によって、あるいは伝承する者の思い違いや見間違いによって、混濁させられることもあれば、あるいはこうしたことによって意図的に変更されることもある。それゆえ、伝承の目下の形態がもともとの形態と合致するか、あるいはそれから逸脱するかを、つねに同時に確認することが

肝要である。批判はそれゆえ三重の課題を有する。第1に、批判は与えられた言語作品ないしその一部が、言語の文法的語義、歴史的根拠状況、著者の個性、およびジャンルの性格に相応しいか、あるいはそうでないかを、調べなければならない。しかし単に否定的に処理しないためには、批判は第2に、もし何かが相応しくないように思われるときには、いかにすればより相応しくなるかを確認しなければならない。しかし第3に、批判は伝承されたものが本来的であるか、あるいはそうでないかを、調べる必要がある。これによって批判のあらゆる事実的な努力が汲みつくされていることが示されるであろう。わたしは、解釈学の叙述と並走しかつわたしに特有な、理論の特別な実施によって、このことを提示するであろう。けれども、わたしは批判の価値、批判的才能、批判的真理の度合い、および批判と解釈学の関係について、まず若干の一般的注釈を前もって述べることにする。

§ 28. シェリングは学術的研究の方法に関する講義において (原著 77 頁)、批判について次のことを褒めたたえている。すなわち、批判は成年男子の年代になってもなお、少年らしいままの感覚を快く働かせることができるように、少年時代に相応しい仕方でいろいろな可能性の発見を行うというのである。ここから明らかになることは、プラトンの『ゴルギアース』に登場するカリクレスが、哲学を青年が従事するものにせしめ、成人にあっては哲学することとどもることは、ひとしく殴打に値すると見なすのと同じように¹⁸、シェリングが批判を本来的には少年のための訓練と見なしているということである。もちろんシェリングが、批判とは諸可能性を突きとめることであると見なすとき、彼は批判の本質を把握しなかった。批判はたしかに伝達のいかなる形態が所与の諸条件にしたがって可能で

¹⁸ [原注] 1835年のベルリン講義目録へのプロオイミオン「研究方法の正しい論拠について」*De recta atrium studiorum ratione* (『小品集』第4巻、400頁以下)を参照されたい。

くのいわゆる批評家のいかがわしい判読による校訂ほど無批判的なものはないからである。ヴァルケナルとヘムステルホイス²²はそれゆえ、彼らの優れた演説において、学問に真に通じている人は誰でも批評家でなければならない、という観念を詳述している（『ティベリウス・ヘムステルホイス談話』²³、77頁参照）。しかし批判的検査と比較は、同時に伝承のなかの相応しいものを確定するので、批判はあらゆる学問的生産を、それが発現したかぎりにおいて、学問の理想へと連れ戻し、そしてこのようにしてこの積極的な側面で、あらゆる学問的研究の必然的な器官にもなる。批判は判断と嗜好を形づくるのである。

それにもかかわらず、とくにオランダの文献学者たちが行ったように、というのは彼らは批判を文献学の本来的課題と見なしたからであるが、批判の価値を過大評価してはならない。音節や言葉の先端を究明することに世界の救済がかかっていると考えられた時代が存在した。そしてしばしば文献学者に固有の虚栄心をもって、ひとはこのような文法的産業をあらゆる学問の頂点であると宣言し、それを神のごとき批判 (*diva critica*) と名づけた。実際、稀少な神性である！ その際、ファウストとともに神に類似したわが身に関して不安になる人がいるかもしれない²⁴。そのように過大評価されたのは、一面的な間違った批判であった。というのは、真の批

²² Tiberius Hemsterhuis (1685-1766)。

²³ David Ruhnken, *Tiberii Hemsterhusii Orationes*. ed. Friedrich Traugott Friedemann (Wittenberg: Zimmermann, 1822).

²⁴ ゲーテの『ファウスト』第1部「夜」の場面には、「己の胸のざわめきを鎮め、悲しい心臓を喜びで満たし、神秘的働きで己の周囲の自然の諸力を己に明らかにしてくれるこの符の書き手は、神だったのかのではあるまいか。己が神なのか。ひどく心が澄んでくる。」(435-439)とか、「神の似姿と自惚れた己は、もう永遠の真理の鏡のそばにいたいと思ひ込んで、うつせみの身の上を超脱して、天上の明るい光耀を浴びたつもりでいた。」(614-617)といった表現が見出され、神に類似した我が身に苦悶するファウストの葛藤が描き出されている。

判は自己を過大評価することから守られているからである²⁵。自己自身を持ち上げる尊大な批判はまた、もっぱら破壊的に作用する。それは判断の唯一確かな根拠であるところの、自己自身を否定する解釈を拒むからである(原著124頁参照)。本物の批判は独立した創造物を決してもたらさないもので、それは慎ましく、その良い影響を与える作用は目立たない。その価値は、それが欠如するや否や立ち現れる荒廃においてのみ示される。それゆえ、ひとがそれは些事に拘泥的なものと見なすからであれ、あるいは破壊的なものと見なすからであれ、ひとつの時代が批判に敵意を示すとすれば、こうした非難は間違った批判に向けられているか、あるいはひとが真の批判を誤認しているかのどちらかである(ダーフィット・ルーンケン『ティベリウス・ヘムステルホイスへの賛辞』²⁶参照)。けれども、批判が生産を鈍らせず、また理念の能力を弱めないためには、批判に対してつねに平衡が保たれなければならない(原著26頁以下参照)。ウェイユは非常に美しく語っている(『ラテン文学講義序論』²⁷, 17頁)。すなわち、「批判は非常に陰険でつねに否定的な道案内である。ソクラテスのデーモンのように、それはあなたを立ち止まらせるが、しかしそれはあなたを決して歩かせない」(La critique est un guide très-sournois, toujours négatif: comme le démon de Socrate, elle vous arrête, mais elle ne vous fait pas marcher), と。

§ 29. わずかな人が真の批判を行う。実際、真の批判を行うためには、解

²⁵ [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』6頁参照。

²⁶ David Ruhnken, *Elogium Tiberii Hemsterhusii* (Sam. et Joh. Luchtmans, 1768; Leipzig: B. G. Teubner, 1875). なお、ティベリウス・ヘムステルホイス(Tiberius Hemsterhuis, 1685-1766)はオランダの有名な文献学者。

²⁷ Henri Weil, *Ouverture du cours de littérature latine* (Strassburg: P. Dupont, 1846).

積のため以上にさらに高度の天分が必要である (原著 87 頁を見よ)。というのは、解釈学の場合には、対象を献身的に自分のものにするのが支配的であるが、批判は — それが適切なものないし原初的なものを再生産すべきであるとすれば — 解釈学以上に自発性を必要とするからである。けれども、このことは比較的のみに、つまりひとが2つの機能の対応する種類を考慮に入れるときにのみ、その通りなのである。例えば、個人的解釈のためには言葉の批判のためよりもはるかに大きな自発性が必要であるが、個人的批判のためほどではない。批判的才能の本性は、批評家が解決しなければならない課題から生じてくる。伝承のなかで不適切なものと適切なものを区別するためには、批評家は客観性を繊細な判断と結合させなければならない。原初的なものを回復するためには、明晰な頭脳、つまり明敏さが必要である。しかしそれに加えて、ペントリーがホラーティウスの版の序言で要求しているように、批評家は必ずしも所与のすべてのものを適切かつ真正銘のものと見なさないために、疑り深い意識 (animus suspicax [疑いがちな心]) を持ち合わせなければならない。最後に、批判のあらゆる3つの課題のためには、最大の正確さが必要である。見かけ上の批判的才能は、屁理屈をこねることや小利口さに存している。これは対象の要求の代わりに自分自身の主観的思いつきを据え、そして解釈学的に理解そのものへと入り込むことなしに、批判し始める。批評家は頭脳だけでみずからの課題を解決できるとか、批判的才能はより高度の明敏さ、つまり区別の才にのみ存するなど、決して考えてはならない。すなわち、解釈学的課題において浮かび上がった循環に、批判もまた関与しているのである。個はたしかに包括的な全体の性格から判断されなければならないが、全体はふたたび個から判断されなければならない。それゆえ、批判においても最終的決断は、歴史的真理に対する揺るぎない意識から生じる直接的感情に存している。この感情をできるだけ内的な強さと明晰性へともたすことは、批評家の最高の努力でなければならない。やがてそれは反省することなしに確実に正しいものを的確に捉える芸術的な衝動へと発達する。これは古代人たちが手練(εὐστοχία)と呼ぶところのものである。し

かしこれは解釈学的修練を沢山積むなかから生じてくるものである。それゆえ真の批評家はつねにまた優れた解釈者である。当然のことながら、逆のことは必ずしも起こらない。個人的解釈をひとつも理解しない文法的解釈者が沢山存在するように、多くの解釈者は批判についてひとつも理解しない。とくに事実説明に関わる人たちのなかにこの手の人がいる。彼らは資料に圧倒されて、それについての判断を、つまり資料を検討して整理することを、忘れてしまうのである。この種の代表例がサルマシウス²⁸である。批判的でない解釈者は、優れた批評家が彼のために道を切り拓いてくれたときに、はじめて文筆作業において何某かのことを成し遂げることができる。しかし非常に優れた解釈学的才能は通常また批判的でもある。解釈学的感情との密接な結合のうちにのみ批判の本当の神性 (Divinität) は存している。それは生産的な想像力 (productive Einbildungskraft) によって伝承の欠如を補完し、それによって予見的 (divinatorisch) になる。これは羊皮紙に書かれた古文書からではなく、みずからの力から湧き出る天才的批判である²⁹。それはさまざまな形式で現れる。若干の人々においては、批判は明瞭性ないし明朗性という性格を有している。例えば、ベントリーの場合がそうである。他の人々においては、それは不可解で深遠であるが、しかし内奥において最高に素晴らしい。例えば、実際に明敏な批評家であったヴァルケナルの場合がそうである。——これは単に叙述においてではなく、理念についての批判的な考え方そのもののうちに潜んでいる1つの相違である。しかし予見 (Divination) はつねに理知的な思慮深さと結びついていなければならない。疑り深い意識が直観の客観性によって制限されない場合には、それは批評家を容易に間違った道に導く。ベントリーやヴァルケナルのような人ですらしばしば道を誤った。そしてヴァルケナル的な深遠さはとくに文法的批判において押し戻されることが多いように思われる。一般的に、批評家が行う100の判読による校訂のうち、5つは正

²⁸ Claudius Salmasius (1588-1653)。

²⁹ [原注] 『小品集』第7巻, 51頁参照。

しくないと主張することができる。「最良の鑑定家は、一方で素早く知覚し、他方で緩やかに判断を下す人である」(Ἄριστος κριτῆς ὁ ταχέως μὲν συνιείς, βραδέως δὲ κρίνων.)。

§ 30. 批判は解釈学と提携して歴史的真理を突きとめるべきである。歴史的真理は真理一般と同一の論理的諸条件に基づいている。つまり、1. 前提条件の正確さと、2. 推論の正確さに基づいている。数学的原則や一般にそれ自体において明瞭な人間精神の単純な直観のように、前提条件というものは直接的に真であると認識され得るか、あるいは他方また他の真なる前提条件から推論によってのみ認識されている。後者はそれ以上特別な考察に値しない。さて、批判的・積義的主張が直接的に確かな前提条件か、あるいはそうでなければ確実であると証明された前提条件に基づいており、そして例の前提条件がその基礎に存している推論が正しいかぎり、われわれは歴史的真理そのものを見出したのである。真理に似通ったものに真実らしいもの (das Wahrscheinliche [verisimile, εἰκόσ]), あり得るもの (das Annehmliche [probabile, πιθανόν]), 信ずべきもの (das Glaubliche [credibile, πιστόν]) がある。これらの相違は真理の度合いとして証明される。われわれは十全なる真理に接近しているが、けれども十分に証明されていないものを、真実らしい (wahrscheinlich) と名づける。他の真理と一致しているが、みづから真であることが実証されていないものを、あり得る (probabel) と名づける。われわれの表象と一致しているが、客観的な証明が存在しないものを、信ずべき (glaublich) と名づける。これらすべてのものは推論された命題において前提条件に基づいている。というのはもし推論が間違っておれば、ひとは学問的真理の何らかの度合いについて決して語るができないからである。たしかに真実らしいことの本質は、その他の点では確かな推論における前提条件の不確かさに存している。前提条件がわれわれの表象のみに基づいており、それと一致しているにすぎないため、つまり一般に証明されていない表象にすぎないため、そこから首尾一貫して推論されるすべてのことも、単に可能的であるにすぎ

ない。真実らしいものにおいては、前提条件は客観的な証明力を有している。なぜならば、真理の本質は、もし1つのことが必然的であれば、他のこともまた必然的である、ということに存しているからである。真実らしいことの本質はしかし、もし1つのことが必然的であるとしても、他のことはまだ必然的ではなく可能的であり、そしてそれに加えて普通は、通常はそうであるということに基づいている。それゆえ、真実らしさ〔蓋然性〕の度合いは、推論の1つないし2つの前提条件がそれに基づいている、帰納的推理の方向を向いている。しかし外的経験においては、そのような帰納的推理は決して完全ではあり得ないので、解釈学と批判は、もし前提条件が直接的に確実でなければ、十全な真理に到達することはない。あり得るものは明らかにより低い度合いの真実らしさ〔蓋然性〕にすぎない。しかしながら、前提条件の確実性を測る尺度はきわめて主観的であり、非常にしばしば直視力の度合いに依存している。古代の認識の真ただ中に立っている人は、他者にはまったく不確かのことを、直接的に確かなものとして眺める。けれども、判定する人が完璧な帰納的推理を目の前に手にしていると信じる時、より大きな知識にはふたたび誤謬の危険がある。持っている知識が不完全であるような人、すなわち、古代について十分なものの見方を有していない人は誰でもそうであるが、そういう人は無数の事情を見落とし、しかも自分の前提条件は真であり、真理に最も近く、あるいは真理と一致していると信じることができるが、その反面彼の前提条件はまさに真理に矛盾する。ソポクレースのアンティゴネーの時代に関するザイトラー³⁰の研究は、ひとつの実例を与えてくれる。彼はあまりにも慎重さを持ち合わせず、古代に由来するあまりに小さな範囲の見方をもっていたので、自分の前提条件が完全に確実であると信じていた。わたしは彼の前提条件が完全に不十分であることを指摘しておいた³¹。それゆえ、古代

³⁰ August Seidler (1779-1851)。

³¹〔原注〕1843年版の『アンティゴネー』、125頁以下。1884年の新版、106頁以下。

のできるだけ大きく豊かなもの^の見方なくしては、実り豊かな批判的あるいは積義的な研究は、まったくもって考えることができない。こうしたものの見方の広さは学識 (Gelehrsamkeit) に存しており、その深さは天才的資質 (Genialität) に存している。両者の尺度に従ってのみ前提条件は評価され得る。単に表象と一致しているにすぎないものとしての信ずべきものは、このため漠然とした、そしてほぼ完全に役に立たない範疇である。豊かな学識と天才的資質を有する人にとって信ずべきであるところのものを、無知で精神を欠いている人はまったく信じるに足らないと考える。そして後者にとって信ずべきであるものを、前者はしばしばまったく不可能であると考ええる。

しかし確実性の度合いは前提条件に従っているだけでなく、往々にしてまた非常に主観的な性質の論証の形式自体にも従っている。けれども論証の形式ということで、ここでわたしは一般的に論理的な形式を理解しているわけではない。ゴットフリート・ヘルマンは、他者の批判的および積義的な議論を論理的な定式に従って判断し、そしてこうした議論を論理的な定式へと変換するのを常としていた。このこと自体は非難されるべきではないが、文献学的証明のやり方には、一般的論理学によってのみ与えられているのではない、ある形式がある。ヘルマンの要求を正しく評価するためには、もちろん頻繁にやらなければならないだろうが誰もそれを三段論法で記述するように要求することなどできない。ライプニッツはしばしば自分の教えを補遺的に三段論法で形づくるが (『神義論』におけるように)、彼はエルトマン³² 編集の『哲学的著作』 *Opera philosophica* の第1部 425 頁で次のように述べている。すなわち、「そうでなければ、つねに詩を作ることが必ずしもふさわしいことではないように、つねに三段論法で身を投げ出すことも必ずしもふさわしいことではない」³³。正しい弁証法のみ

³² Johann Eduard Erdmann (1805-92)。

³³ “Leibniz an Gabriel Wagner,” in *Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz*, herausgegeben von C. I. Gerhardt (Berlin:

が重要であり、これは三段論法を用いてもあるいは用いなくても可能である。つまり、推論が短縮されたとしても、だからと言って不正確になるのではないかぎり、三段論法なしでも可能である。その弁証法が三段論法的な形式に耐える能力があるということでも十分である。しかしより大きな明敏さをもつ研究者は、他の研究者がもはや見つけないより微妙な相違を、同一の対象に見つけ、そして他の研究者が蓋然的なものとして与えたに過ぎないものを、確実性へともたすことができる。つまり、彼は前提条件をより正確な選別によってより詳細に規定し、他の研究者が導き出すことのできない結論を、それらの組み合わせによって導き出すからである。これが文献学的・批判的な弁証法である。実り多い組み合わせは、前提条件をそのような立場と結合へともたすことに基づいているので、ひとが通常見るところよりもより多くのものがそこから飛び出してくる。すなわち、まさに多くの事実が合成されて、その結果つねに新たな事実が飛び出てき、そしてここからふたたび新しいより確かな事実が飛び出してくるためには、しばしば長い回り道が必要である。しかし直観の確実性が見捨てるとすれば、最大の明敏さといえども道を間違える。前提条件が間違っていれば、最も明敏な研究といえども誤謬を織り込んだ網目のごとくになってしまう。それゆえ、ひとはほかならぬ空虚な明敏さととりわけあらゆる単なる主観的な判断に対して用心しなければならない。ひとはできるかぎり一種の数学的客観性に到達するよう努めなければならない。そしていかに俊敏な組み合わせが必要とされようとも、ひとはこのような組み合わせにおいて、決して明確な直観から遠ざかってはならない。あらゆることはアルファとオメガとしての明確な直観に行き着くからである。あらゆる断片的なものの批判においては、組み合わせが優勢である。そこでは個々のものから全体が構成されなければならない。ここにおいては高度の注意が必要であり、そしてしばしば、ひとはそのような高度の注意を保持しないので、こ

Weibmannsche Buchhandlung, 1890; ND, Hildelsheim, Zürich, und New York: Georg Olms Verlag, 1996), 526.

とにあまり興味のない事柄においてそうであるので、漸次的な成功しか可能ではない。例えば、わたしは『ギリシア碑文集成』の Nr. 511 においては、自分の関心をひかない事柄に倦み疲れていたもので、十分な注意力を待ち合わせていなかった。G・ヘルマンは始めからその研究をしてきて、今や仕事の下準備ができていた。だからより上首尾な仕事のできたのである³⁴。

§ 31. 歴史的真理は解釈学と批判の共同作業によって突きとめられる。われわれはそれゆえ、いかなる仕方でこの共同作業が行われるのかを、より詳しく考察しなければならない。われわれがすでに見たように、解釈学はいたるところで対立と関係の考察へと落着する。しかし解釈学は、個々の対象それ自体を理解するために、そうした対立と関係を考察する。それに対して批判は、そこからみずからの固有の課題を解決するために、つまり個々のものとそれらを条件づけている包括的な全体との関係を把握するために、解釈学的なものを、つまり個々のものの解釈を前提しなければならない。ひとはそれ自体として理解することなしには、いかなるものも判断することができない。批判はそれゆえ解釈学的課題を解決されたものとして前提する。だがひとは非常にしばしば、対象の性質についての判断を事前に固めてしまわないと、解釈の対象をそれ自体として理解することができない。それゆえ、解釈学はふたたび批判的課題の解決を前提する。ここからふたたび1つの循環が成立するが、かかる循環はある程度困難なすべての解釈学的ないし批判的課題においてわれわれを阻み、そしてつねに近似によってのみ解決され得るものである。ここにおいてひとは原理の請求 (petitio principii) を避けるために、絶えず一方から他方へと移行しなければならないので、批判と解釈学は実行において分離されることはできない。両者のうちのいずれも他方に時間的に先行することができない。し

³⁴ [原注] 『ギリシア碑文集成』第1巻, XVI および 913 頁以下参照。

かし理解した内容の詳述にとって、〔批判と解釈学の〕結びつきは、明瞭性がそれによって被害を受けないときのみ保持され得る。難しい課題や広範な課題においては、わたしがピンダロスにおいて行ったように、批判的覚書を積義的注釈から分離しなければならない。

解釈学と批判の関係が生み出す大きな循環のなかに、ふたたび常に新たな課題が次々と潜んでいる。というのは、いかなる種類の解釈と批判も爾余の解釈学のおよび批判的課題の完成をふたたび前提するからである。われわれは批判的活動の4つの種類をより詳しく考察する際に、このことを考慮に入れるであろう。それではこれから解釈学的活動の4つの種類に向かうとしよう。

I. 文法的批判 (Grammatische Kritik)

§ 32. 判断は解釈と同様、まず言語要素に関連しなければならない。批判がこの点で答える必要がある3つの問いは、1) 各々の与えられた箇所各々の言語要素が適切であるか、あるいはそうでないか、2) 後者の場合には、何がより適切な言語要素であるだろうか、そして3) 何が原初的に真であるのか、ということである。ここにおいては語義 (Wortsinn) の判断が問題なので、ひとは文法的批判を言葉の批判 (Wortkritik) と名づけることができる。

1. 言語要素の適切性に対する基準は、われわれが文法的解釈において述べたすべてのことに従えば、言語の慣用ということである。すなわち、言語要素が言語の慣用一般にとって、言語の一般の原則にとって適切であるかどうか、まず調査されるべきである。例えば、偽プラトンの対話『ミーノース』において、古い版では $\alpha\nu\omicron\mu\mu\omicron\varsigma$ という語が繰り返し見出された。この語の形式は一般に通用している言語の慣用に矛盾する。つまり $\omicron\varsigma$ の形の名詞 — そこから接頭辞 α によって否定的意味をもつ欠性の形容詞と、接尾辞 $\mu\omicron\varsigma$ によって肯定的意味を持つ形容詞が形づくられる — は、欠性の接頭辞 α と接尾辞 $\mu\omicron\varsigma$ を伴う形容詞を形づくらない。かくして $\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$,

λόγιμος, ἄλογος ; μόρος, μόριμος, ἄμορος ; τροφός, τρώφιμος, ἄτροφος などとなる。ἀλόγιμος, ἀμόριμος, ἀτρώφιμος は用いられないことがない。ἀνομιμος もまた言語の慣用に反している³⁵。それにもかかわらず、その語が帰納的推理によって確認されているので、それに対する訴訟手続きが起こるとき、判断は直ちに不確かになる。実際、δόκιμος から ἀδόκιμος が生じていることがいまや見出される。それゆえ、ἀνομιμος を言語的に矛盾しているとして攻撃することは、正当ではないように思われる。だが、それとは正反対の訴訟手続きも調べられなければならない。δόκος (妄想) という名詞は非常に稀少であり、λόγος と λόγιμος のように、形容詞 δόκιμος (妥当な) と意味上の密接な関係にはなく、むしろその形容詞は δοκέω の語幹と直接的に連関している。ἄδοκος もそれゆえ、用いられないことがない。したがって、このような一見したところの例外によって、ἀνομιμος の攻撃へと導かれるところの、類推の正しさが証明される。しかしいろいろな類推の提起は言語についての包括的な知識と最大限の慎重さを必要とする。クセノポーンの『狩猟について』第2巻5には、手稿本と古い幾つかの版に6つの形が見出され、それらの形においては数を表す言葉が -ωρυγος と合成されているように思われる (διώρυγα, τετρώρυγα, πεντώρυγα など)。それらは尋 (ひろ) による長さの単位を表している (2尋, 4尋, 等々)。さて、尋は ὄργυια といい、これに対して ωρυγα は「掘る」という意味に導かれるように思われたので、クセノポーンの著作の近代の編集者たちは例の言葉を言語矛盾的と見なし、そうした言葉の代わりに διόργυια などを据えた。しかしながら、こうした言葉がもともとそのように存在したことを、πεντώρυγα という形が証明する。この語は建築用材の5尋の長さを表示するために、アッティカの海洋文書に頻出する。ὄργυια のより古い形はすなわち ὀρόργυια である — そこから πεντορόργυιος などが派生している。さてしかし、πεντώρυγα の形がここからいかにして成立したかは、説明するのが困難で

³⁵ [原注] 『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』, 53頁。

ある。なぜならば、言語においては必ずしもすべてのことが厳密な類推に還元され得ないからである³⁶。言語においては、思考の一般の原則に反する慣用的になった違反すら存在するが、それにもかかわらずこうした違反は言語の慣用に属している。このように古い言語においては、歪んだかたちの、論理的に間違った構成や言葉の結びつきが多く見出される。上で(原著 105 頁)紹介した ἀλλοι の言語の慣用は、やぶにらみ的な思想を含んでいるが、にもかかわらずこの思想は他の言語においてもまた見出される。しかし、もしひとがここで——これまで試みられてきたように——非論理的なものを不適切なものとして削除訂正しようとするれば、間違っている³⁷。ὅτι〔…ことを；…であるから〕と対格を伴う不定詞のような³⁸、あるいは ὡς εἴκε〔そう思われる〕と定動詞の代わりに不定詞のような³⁹、2つの構成が混合したのも現に存在するが、これらの場合もまさにこれに属する。ラテン語の *in praesentiarum* のように⁴⁰、統語論には反するが、それにもかかわらず用いられている構造も存在する。それゆえ、一般に不適切であるものも、言語においては「慣習は専制主」(*usus tyrannus*) によって、および間違った見解によって、適切なものとなり得るのである。文法は辞書編集法を含めて、言語作品から解釈学的活動によって獲得されるので、その際言語のなかで市民権を与える。

最も難しいのは、爾余の言語の慣用から隔絶している形について決定を下すことである。あらゆる言語において、まずその性質が唯一無比である

³⁶ [原注] 『アッティカ国家の海事についての古文書』, 412 頁参照。

³⁷ [原注] 『ハインドルフ版プラトンの『対話篇』に対する批判』*Die Kritik von Heindorf's Ausgaben Platonischer Dialoge* (『小品集』, 第7巻, 68 頁) 参照。

³⁸ [原注] 同上, 67 頁。

³⁹ [原注] 同上, 68 頁。

⁴⁰ [原注] 文法的には *in praesentia* (現在に、今のところ) となるべきであり、前置詞の *in* と *praesentia* の複数属格との結合はたしかに統語論的にはおかしい。

形が存在する。ギリシア人はこうした形を *μονήρης λέξις* [特異な言葉] と名づけた。そこでわれわれはヘーロディアーヌスの『変則語について』 *περὶ μονήρους λέξεως* という小著をいまなお持っている。これは何らかの点で規則のもとにもたらされないいろいろな言葉の一覧表である。そのような語はそれ自体としてしばしば使用され得るのであって、例えば *πῦρ* [火；熱] という言葉がそうである。しかしその性質において孤絶している形は滅多に現れないので、ひとはそうした形が言語の慣用に対応しているかどうか、容易に疑うものである。類似の疑いは *ἅπαξ λεγόμενα* [ただ一度だけ言われし語] においても成立する。すなわち、これは一般的にただ一度だけ、ある特定の箇所において現れる形である。語形変化や構造はそれらの本性上、より一般的に反復されるので、こうしたことは主に言葉に見られる。ひとはここで類推による検証を行うよう命ぜられているにすぎない。例えばガレーノス⁴¹ において、*λευκόχρως* が *ἅπαξ λεγόμενον* [ただ一度だけ言われし語] として見出されるとすれば、それはあらゆる類推に反して *λευκόχρως* [色白の] を意味するのであるから、ひとはこれを正しいものとして承認しないであろう⁴²。けれども、古代の言語的記念碑は圧倒的に大部分が消滅してしまっているので、ひとは *ἅπαξ λεγόμενα* [ただ一度だけ言われし語] を、もし決定的な根拠が反対しないのであれば、それがもともと伝承されたものであると証明されたらただちに、言語的に正しいものとして妥当せしめなければならない。

しかし文法的批判はあらゆる言語要素において、それが言語一般にとって適切であるかどうかを調べなければならないだけでなく、それが特定の環境において適切であるかどうかを、すなわち、それが特定の時代と特定の圏域における (原著 102 頁を見よ) 言語の慣用と一致しており、それらとの連関に合致するかどうか (原著 107 頁を見よ) を調べる必要がある。

⁴¹ Klaudios Galenos, Κλαύδιος Γαληνός (c.129-c.199/216)。

⁴² [原注] 『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』, 139 頁参照。

プラトンの『法律』第3巻682Aにおいては、すべての手稿本には ἐνθεαστικόνという言葉がある。この言葉はプラトンにおいてはそれ以外には見出せないもので、その箇所でも全体の文脈には不適切に挿入されている。しかしこれは新プラトン主義者のお気に入りの言葉であり、それゆえこれはプラトンの言語の慣用ではなく、後の時代のそれに対応している⁴³。ピンダロスの『オリンピア祝勝歌集』第2歌には、ἀλαθινόςという言葉があるが、これはピンダロスの他の箇所には現れないものである。ピンダロスにはἀλαθηςという形しかない。そこから導き出されたἀλαθινοςは散文中で用いられていたが、ピンダロスの時代にはおそらくまだまったく形づくられていなかった。いずれにせよ、それは彼の言語の慣用に反しており、また古い時代の抒情詩一般の言語の慣用に反している⁴⁴。にもかかわらず、ピンダロスにおいても少なからぬものが通常の類推に反しているが、しかも適切であることが可能である。例えば、ピンダロスがΧρήματαを能力あるいはお金の意味ではそれ以外のところで用いないとすれば、この言葉はまづもって抒情詩の性格から解釈されるべきである。というのは、Χρήματαはこの詩人がそれを越えて聳えている、普通の日常語の圏域にふさわしいからである。とはいえ、それはピンダロスにおいて2つの箇所で現れ、そこにおいては普通の生活の基調が支配している。例えば、『イストミア大祭』第2巻11には、Χρήματα, Χρήματ' ἀνὴρ, 「お金, お金こそ人間である」とある⁴⁵。このように言語の慣用を判断するためには、しばしば種類的批判と個人的批判の力を借りなければならない。かなり多くの場合に、ひとはまたこの関係において、真正の伝承として証明されるものを、適切なものとして見なすように制限されている。なぜならば、われわれの言語の慣用の

⁴³ [原注] 『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』, 163頁以下参照。

⁴⁴ [原注] 『ピンダロス全集』第1巻, 356頁。

⁴⁵ [原注] 『ヘルマンの書「解釈者の職務について」の批判』 Die Kritik von Hermann's Schrift de officio interpretis (『小品集』, 第7巻, 412頁) 参照。

知識はしばしば、伝承について否定的な見解を述べるためには、十分でないからである。

しかし伝承の尊重は、あらゆる真正のものがただちに言語的に適合的であるというところまで行ってはならない。古い言語的著作のなかには統語論に反する違反が見出される。これについて古代の文法学者たちはソロイクスモイ語法違反 (σολοικισμοί) と呼んだ。これには語形論違反つまりバーバリズム (βαρβαρισμοί), 語義違反つまりアキュリオロジー (ἀκυριολογία)⁴⁶, そして正書法違反がある。しかしこれらすべての関係において, 文法は言語的著作からはじめて獲得されるので, もちろんひとは言語法則を不完全な機能的推論から導出したたり, つぎにそれと一致しない事例を不正確と見なした

⁴⁶ ベークは Akyriologia (ἀκυριολογία) と表記しているが, 大きな辞書にあたって調べても ἀκυρολογία しか載っておらず, ἀκυριολογία は見つからない。ちなみに, ἀκυρολογία の意味は *incorrect phraseology* とある。Cf. *A Greek-English Lexicon*, compiled by Henry George Liddell and Robert Scott; revised and augmented throughout by sir Henry Stuart Jones with a Supplement 1968 (Oxford: The Clarendon Press, 1990), 59. なお, オックスフォードの古いラテン語の辞書には “acyrologia, ae, f., = ἀκυρολογία, in rhetoric, an *impropriety of speech*” とあり, 補足的に “in pure Lat. *improprium* or *impropria dictio* is used instead of it” と記してある。Cf. *A Latin Dictionary*, revised, enlarged, and in great part rewritten by Charlson T. Lewis and Charles Short (Oxford: The Clarendon Press, 1975), 26. 別の最新のラテン語の辞書にも, “acyrologia, ae. f. (ἀκυρολογία), das **uneigentliche Reden**, der **uneigentliche Ausdruck** (rein lat. *Improprium* od. *Impropria diction*), Gramm.” と記されているので, ひょっとすると Akyriologia (ἀκυριολογία) は誤植かもしれない。Cf. *Der Neue Georges*. Ausführliches Lateinisch-Deutsches Handwörterbuch. Ausden Quellen zusammengetragen und mit besonderer Bezugnahme auf Synonymik und Antiquitäten unter Berücksichtigung der besten Hilfsmittel ausgearbeitet von Karl-Ernst Georges, herausgegeben von Thomas Baier, bearbeitet von Tobias Dänzer (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2013), 77.

りしないよう警戒しなければならない。

2. もしひとが言語要素を不適切と認識したとすれば、その言語要素を単純に取り除くことによってか、あるいは別のものを代用することによって、欠点は取り除かれる。例えば以下のような言語形式素(Glossemen)においては、すなわち、ある書物の本文に解釈のために——欄外註(Glossen)として——書き加えられ、その後誤って本文のなかに受け入れられている言葉においては、適切なものの回復は1番目の単に否定的な仕方で起こる。かくしてプラトンの『法律』における例の ἐπιθεαστικόν(原著182頁参照)は、新プラトン主義者の言語形式素である。ここでは忍び込んだ語の単純な削除で十分である。もしひとが何かを欄外註要素と見なすとすれば、ひとはそれによって、不適切なものが原初的なものであったかどうかという問いを、すでに決定しているのである。しかし当然のことながら、ある言葉は著者自身によって余計なものとしてされることもあり得るのであり、したがってその言葉を単純に削除することによって、表現がより適切になるであろう。だが、主として、古い言語的記念物においては、多くの言語形式素が否定しがたく現れるという理由によって、批評家は単に必然的でない表現を、容易にそそのかされて余計なものとして見なす。それゆえ、同義語的な表現や言い回しが度重なると、ひとは言語形式素を推測するよう誘惑される。しかしこうした度重なりにはおそらく然るべき根拠があるか、あるいはそのなかに不正確に現れる表現は、著者の個性のなかにその説明を見出す⁴⁷。

しかし大抵は不適切な言語要素は単なる削除によっては訂正されず、別のものを代替することによって訂正される。例えば、転記者の間違いが潜んでいるような比較的容易な場合には、印刷ミス以上の明敏さと結合の才は要求されない。しかし非常に多くの場合、この課題は法外に困難

⁴⁷ [原注] 『ハインドルフ版プラトンの『対話篇』に対する批判』 Vergl. Die Kritik von Heindorf's Ausgaben Platonischer Dialoge (『小品集』, 第7巻, 59-60頁) 参照。

である。所与の連関のなかに不適切な言語要素が見出される場合には、解釈を成し遂げることができないという解釈学的欠陥がまず明らかになる。するとひとは満足のいく意味を見出すために、間違った要素の代わりに正しい要素を設定しようとする。周囲の諸要素がすでにしっかり規定されている場合には、このことは容易いが、しかしより重要な課題の場合には、欠如しているものが見つかるまでは、周囲の諸要素自体が完全には理解可能とならない。それゆえ、欠如しているものはまだ把握されていないものから見出されなければならないが、しかもこのまだ把握されていないものは、欠如しているものから把握されるべきである。このような矛盾は悟性を混乱させ、批評家をして途方に暮れた状態にもたらし。ここでひとはご託宣に問い合わせたくなる。だがわれわれは実際にはそのようなご託宣を精神の予見的な力のうちに (in der divinatorischen Kraft des Geistes) 有している。批判的な芸術家は、著作家の精神に完全に滲透され、その著作家のやり方と目的に完全に満たされ、そして周囲の状況についての知識を装備して、一瞬にして正しいものを作り出す。彼は精神の制約を突破して、著者自身が不正確な表現に責任がある場合ですら、著者が何を意図していたかを知る。そのようにしてひとは単に1つの言葉だけでなく、しばしば多くのことを見出す。反省を伴う批判に対しては、並行記事〔類例〕が役立つ。しかし本当の芸術家は、みずからの精神のうちで生き生きとしている、あらゆる言語の慣用によっても満たされていなければならない。並行記事〔類例〕を採す骨の折れる作業は、おそらくあとではじめてなされるものである。あらゆる言語の慣用は、精神が無意識的に正しいものを把握できるために、生産の瞬間という一瞬のうちに現臨していなければならない。感激が欠如しているところでは、何事もなされない。『ギリシア碑文集成』のNr. 511において、わたしに感激が欠如していたようにである。並行記事はつぎに、見出されたものを真に適切であると証明するために、後から挙げられるべきである。こうした証明のやり方は、より適切なものが新しいものではなく、伝承された要素の不在のうちのみ存しているような、最初に批評された事例においてもしばしば適用され得る。しかし

両方の事例において、より適切なものは類推によってのみ究明され得るのであり、並行記事によって究明されるのではないということも起こり得る。にもかかわらず、ここでは最大限の慎重さが必要である。それは類推が許すところのものが実際にも存在したかどうか、ひとは知ることができないからである。とはいえ、ひとが証明を抜きにして単なるルイ推移から校訂できるし、また校訂しなければならないような事例も存在する。

3. ひとは適切な表現を作り出すことによって、文法的な関係における解釈学的要求を満足させるが、適切であると認識されたものが正しいもの、すなわち原初的なものであるかどうかはわからない。このことはまずもって内的な根拠によって決定されるべきである。

不適切な言語要素を真正ではないと解釈するためには、ひとは著者の個性が非常に完璧なものであり、そして叙述内容は彼の性格の意のままになるので、彼が目のあるような違反を犯すとは信じることができないかどうかを、まず突きとめなければならない。したがって、文法的批判は文法的解釈同様、個人的解釈に依存している。理念的結合においてのみならず、個々の言葉の意味、語形変化の形式、および構造において、ならびに配語法においても、著作家のその他の個性やあるいは時代やジャンルの性格——そのなかに韻律も数えられるが——に矛盾する何かが存在することがあり得る。しかしそれを偽物として退けることができる前に、まさにこの事例において逸脱は事柄の本質に根拠づけられていないかどうか、決定されなければならない。だが、これにしたがえば、単に文法的ではなく、それ以外の点でも不適切なものが、真正なものとして通用しなければならないであろう。それはまさにその著作家に特徴的なことであり、それがその著作家の墮落した特徴なのである。タキトゥスは例えばその様式において、批評家たちによってラテン語の天才には不適切であると主張されてきた、そして彼らが部分的に改良してきたところの、さまざまな特徴を持っている。しかしもしひとがラテン語の語法の全体において不適切なものを、いまや端的に不適切と見なし、そしてこの間違いに基づいてタキトゥスにおけるまさに原初的なものを変更したとすれば、それは間違いである。

それゆえ、真正であるのは言語にとって適切なものではなく、著者の個性にとって適切であるところのものである。さてしかし、ある作家においては、言語一般に反していないし、それどころか時代やジャンルにも反していないが、しかし彼のそれ以外の個人的な言語の慣用に対応していないものが、少なからず見出されることもある。彼はこうした場合一般的な用法に従うために、自分の個人的な言語の慣用を捨ててしまっているのである。こうしたことはたしかに稀であり、大抵は伝承の腐敗が推論され得るが、しかし作家が彼のそれ以外の個性にふさわしいことを、どうしても言わなければならないが、とすることはできない。著者の個性から必然性をもって生ずるもののみが、真正なものに見なされなければならないのである。これにしたがえば、ひとは作家の個性と言語の慣用に同時に反しているもののみを、内的な根拠に基づいて偽物と攻撃することが許されるのである。古代の古典的な作家たちにおいては、2つのことは大体において重なり合うので、彼らにおいては真のバーバリズムとソロイクスマン（語法違反）は存在しない、と仮定することができる。それゆえ、彼らの書物においてはバーバリズムとソロイクスマンは、偽物として削除されなければならない。もちろん、古典時代のある著者が書いたとされる書物が、実際にまたこの著者に由来するかどうかは、またもやまずもって個人的批判によって決定されるべきである。古典期ではない作家においては、言語の慣用に反するものの削除をどの程度行うことが許されるか、それを内的根拠から決定することは、はるかに難しいことがあり得る。新約聖書の批判は、これにしたがえば、最も難しい課題の1つである。個性についての判断は、とりわけそれが特殊の事項に深く立ち入るときには、それ自体がふたたびまず特殊の事項から導き出されなければならない。それゆえ、ここでは課題の循環が非常に明確に示され、この循環が問題の解決をとてつもなく困難にしている。しかし解釈学と批判に可能な最も深い洞察にしたがって、あるものが絶対的に不適切であると証明され、その結果いかなる仕方でも真正ではあり得ないと仮定されたとしても、そこから言語的に最も適切なものが原初的なものであるということが、まだ導き出されるわ

けではない。通常は多くの可能性が存在するが、これに対してそのうちのただ1つが原初的なものに的中することができる。この可能性が批判的な判読 (Conjecturen) である。適切であると証明される唯一の判読が、ひとえに校訂 (Emendation) である。1つの判読が著者の個性との結合において言語の慣用から必然性をもって帰結するとき、内的根拠に基づいて校訂が生ずるのである。多くの判読においてこのことが真実である。こうした判読は外的な証明を全く必要としないし、またしばしばその能力もない。なぜならば、大体においていかなる手稿本も十分ではないからである。こうした判読においては、批判の力が最も明確に発現する。比較された写本はまたしばしばのちにそのような校訂の正しさを証明する。校訂は事実連関の中心点から汲み出されるときに、最も首尾好く事が運ぶ。そのような上首尾な校訂が長時間の省察のなせる業であることは稀である。しかしおそらく、ひとが解釈学的修練によってのみ熟達へと至る的確な眼識によって、いちどきに真なるものを見出す前に、長い時間がかかることもある。無意味な箇所がそのとき突如として意味を提供する。それは唯一無比であり得る意味である。そしてこれが各人に執拗に迫る明証性こそ、真理の真の吟味である。タキトゥスの『年代記』第1巻5におけるリブシウス⁴⁸の校訂は、この種の校訂である。ここには *navum id Caesari* と記されているが、この読みではまったく理解できなかった。これを *gnarum id Caesari* と読み解くりブシウスの判読によって、文脈全体が一挙に解明される。わたしがエウリーピデースの『アウリスのイーピゲネイア』第5巻336において行った変更 (*καταινω* に代えて *κατατέω*) も、同様にひとを納得させるに足るものであった。これに関しては、ベルリン大学の1823年の講義目録へのプロオイミオンを参照されたい⁴⁹。そこでは校訂がいかにして文脈から生じなければならないかが示されている。そのようなそれ自体として明確な判読は、それによって可能的なものの周辺領域から実際のものから分離

⁴⁸ Justus Lipsius (1547-1606)。

⁴⁹ [原注] 『小品集』第4巻, 188頁以下。

されているのであるが、ひとはそのような判読を本文のなかに措定する権利を有している。証明はしかるのちに文脈に基づく省察により、および並行記事によって成し遂げられる。この種の批判においてはベントリーが第一等の地位を占めている。真なるものを見出すことができる人はかなりいるが、しかし彼らは内気さゆえに校訂を1つの単に可能的な判読と見なし、それゆえそれに加えて若干の別の判読を提案する。例えば、アンソロジーの版におけるヤコブス⁵⁰がときどきそうである。これはちゃんとした生産には匹敵しない、まだ完成されていない判断のしるしである。ひとは自分自身の判読を正しく判断できるということなしに、判読による校訂を行う明敏さをもつことができる。しかし、もしひとが欲望によって、すなわち校訂の欲 (*pruritus emendandi*) によって思い違いして、揚げ足取り的なものにすぎないものを確実であると思なすとすれば、それははるかに悪いものである。真なるものと揚げ足取り的なものとの区別は驚くほど難しい。多くの人々にとって彼ら自身の思いつきは絶対的に必然的であるように思われる。このような間違った方向性の驚くべき実例は、ライスケ⁵¹、マスグレヴィヴ⁵²(とくに彼のエウリーピデース)、ウェイクフィールド⁵³(ギリシア悲劇)、ポーテ⁵⁴(アイスキュロス、ソポクレス、テレンティウスにおいて)、ハルトウク⁵⁵(アンティゴネー)である。古い古典期の著作についてのそのような研究は、一種の犯罪行為、他者の財産の無視、他者の個性への不埒な侵害である。アテーナイ人たちは雄弁家リュクールゴス⁵⁶の提案に基づいて、悲劇作家の著作に変更を加えることを禁じた。あらゆる古

⁵⁰ Friedrich Jacobs (1764-1847)。

⁵¹ Johann Jacob Reiske (1716-74)。

⁵² Samuel Musgrave (1732-80)。

⁵³ Gilbert Wakefield (1756-1801)。

⁵⁴ Friedrich Heinrich Bothe (1771-1855)。

⁵⁵ Johann Adam Hartung (1801-67)。

⁵⁶ Lykurgos, Λυκούργος (BC 390-BC 324)。アテーナイの政治家・弁論家。アッティカの十大雄弁家の1人。

代の古典的著作家が今日類似の禁止によって守られることを、ほぼ皆願っているといえよう⁵⁷。

内的根拠に基づく真の校訂は、同時に伝承の性質を考慮し、伝承のなかに真理を明証性へともたすための、応急的な補助手段を見出す。というのは、伝承の性質に基づいても、したがって外的な根拠に基づいても、ひとは言語的著作の原初的の形式を推論することができ、そしてもし外的な証拠がその正しさを証明するのであれば、それはその校訂についての最良の検証である。何が真正であり原初的であるのかを決定するために、内的な根拠が不十分であるところでは、ひとはもっぱら外的な認証に頼るよう命ぜられてさえている。外的認証についての判断は古文書学的な批判 (die diplomatische Kritik), すなわち古文書(διπλώματα)の批判の課題である。これは例えば批判の特殊な第5の種類ではなく、すべての人々によって解決されるべき伝承の真正性に関する問いに関して、われわれによって提起された4つの種類のいずれにとっても補助手段となるにすぎないものである。われわれはそれを文法的批判の付録として扱うが、それはこの批判が文法的批判と最も密接に関連しているからである。

§ 33. 古文書学的批判

われわれは上で(原著 170-171 頁)、伝承が混濁させられる3つの原因について述べた。すなわち、1) 外的な破壊的影響、2) 伝承する人の間違い、3) 意図的な変更である。古代の文字作品はわれわれにとって、ごく一部のみ^{オリジナル}原文で存在している。大抵は一連の長い複写の最終結果のみがわれわれの目の前にある。こうした複写は、印刷術の発明以前に複数のやり方で、つまり書き写すことを通して作られている。それゆえ、ここには腐

⁵⁷ [原注] 『最も優れたギリシア悲劇作品たるアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの現存するものがすべて真正であるかどうか』(1808)、12頁以下と、ポーテのテレンティウスの版についての書評(『小品集』、第7巻、159頁以下) 参照。

敗のあらゆる原因が強度に作用してきている。

オリジナル作品といえば碑文 (Inschriften) である。それらのうちの大半のものは外的な自然的影響によって損なわれているにもかかわらず、多数は確実な復興が不可能なほどには切断されてはいない。すなわち、(民族の決議、勘定書の文書等々のような) 同一のジャンルの多くの碑文の部分的な一致の結果として、1つの碑文が他の碑文から回復され、またしばしば1つの碑文の一部が、同一のものとの一致する他の部分から回復される。時折複数の断片が1つの全体へと合成され得る。二三の場合には、今日ばらばらに切断された書物が、切断前に取り出された複写から補完される。しかしこうした外的な手段が不十分であり、そして原状回復が内的根拠から試みられなければならないところでも、ひとはしばしば欠落した文字数を数えることができ、それによって判読による校訂が狭い範囲の可能性に制限されるという事態への、外的根拠をふたたび手にする⁵⁸。韻律的碑文においては、こうした事態はより頻繁に起こる。しかし1つの韻律が存在しているかどうかは、もちろんまず種類の解釈に依拠した検証を必要とする⁵⁹。当然のことながら、切断されたり消失したりした文字は、正確な古文書学的知識の助けによってのみ原状回復され得る⁶⁰。碑文がもともと目指した形式を回復するためには、碑文は間違いやうっかりミスによっても、とくに石工のそれによっても、混濁されていることがあり得る、ということがさらに留意されなければならない。ひとは碑文を読解する訓練を何回も行うことによって、そのような過ちを発見することを学ぶ。最後に、多くの碑文はすり替えられていたり、あるいは意図的に変更されていたりする。ここでは4つの場合が起こり得る。すなわち、碑文は偽物であるが、それが指示する記念碑は本物であるか、あるいは記念碑はすり替えられている

⁵⁸ [原注] 『ギリシア碑文集成』 *Corpus Inscriptionum Graecarum* 第1巻, XXVI-XXVII。

⁵⁹ [原注] 『ギリシア碑文集成』 第1巻, XXVIII-XXIX。

⁶⁰ [原注] 『ギリシア碑文集成』 第1巻, XVIII。

が、碑文は本物であり、したがって碑文はもともと別のところにあったか、あるいは記念碑も碑文も偽物であるか、あるいは両方とも古代のものであるが、別のところから取り出された本物の碑文が、本物の記念碑に移されているか、そのいずれかである。欺瞞を外的証拠によって直接的に確定することは、ごく稀にしか成功しないものである。それゆえ、ひとはいかなる碑文においても真正性の外的基準と内的基準を相互に考量する必要がある。ここではもちろん内的基準に書物の特質や素材の性質も属している。外的基準は記念碑の発見や存続に関する証拠の性質のうちのみ存している。もし碑文が内的根拠に基づいて本物だと思われるとしても、その外的証拠づけの仕方は偽物ではないかとの嫌疑を惹き起こす。この場合には、そのような偽物であることが可能であったかどうか、まず調べられるべきである。もし碑文の内的性質から、いかなる偽造者によっても捏造され得なかったことが判明すれば、そのときにはそれは本物であると承認され得る。それに対して、もし欺瞞の可能性が排除されないとすれば、偽造するための十分な動機が存在したかどうかが問題となる。若干の場合には、この問いが悪名高き偽造者においてすら否定されざるを得ず、その結果これによって真正性に関する疑いが持ち上がる。しかし偽造するための十分な動機が存在するとすれば、内的な基準が実際に真正性を証明するかどうか、もう一度調べなければならない。その場合通常は、ただ見かけの上でのみそうであることがわかる。それにもかかわらず、かなりの場合に判断は未決状態にとどまる。というのは、偽造を確実に仮定すべきであるのは、内的な根拠もまたそれに賛成する場合に限られるからである。外的な証拠づけが真正性に疑いをはさむ余地を与えない場合には、すなわち、証人がみずからを欺こうと欲することも、あるいは他者によって欺かれることもできないことが証明される場合には、最終的な決断そのものは内的な基準にかかっている。そのつぎにまた、碑文は言語、書物の特質、および素材によれば、それがその内容からして属していなければならぬ、そのような時代に属することは不可能である、ということが内的な根拠から明らかになることもある。内的な基準と外的な基準との間のこのような矛盾の原因

は、ここでは古代そのもののうちで探究されなければならない。というのは、かなり多くの碑文が古代に偽造されたからである。別のものは本物であるが、しかしより古い時代の言語や外的形式に従って意図的に模倣され、擬古的な仕方では保存されている。さらに別の同じく本物の碑文はふたたび、復旧作業の結果として、外的にのちの時代の性格を帯びている。ある所与の場合にこれらの可能性のうちのどれが存在しているのかは、明らかに正確な専門知識に基づいてのみ決定され得る⁶¹。

碑文においては、あらゆる疑わしい場合には、^{オリジナル}原文へと遡源すべきである。しかし原物がもはや存在しないか、あるいは手に入らないとすれば、それゆえ複製しか頼りにならないとすれば、その複製が誰によってまたどのような状況下で取られたかが、なканずく調べられるべきである。というのは、丁寧に完成された拓本は原物に匹敵し、そして多くの書写人において間違いはほとんど前提され得ないのに対して、多数の碑文はきわめて間違いのある複製でまず知られているからである⁶²。しかしここでひとは大抵近代に成立した写しに関わっているので、何世紀もの長きにわたって、われわれが個々の点について追及することができない書写人たちによって受け継がれてきている、多数の文字作品におけるよりも判断は確実である。にもかかわらず、古代の文字作品は一般に前提されがちなほどこの種の伝承によって損傷されてはいない。古代そのものにおいては、書写する際に非常に入念なやり方をしたのである。ギリシア人においては、書写はひとつの技芸へと発展させられており、そして写しはわれわれの印刷と同じよ

⁶¹ 『ギリシア碑文集成』第1巻, XXIX-XXX 参照。この箇所では、碑文の真正性を判断するために主張されてきたあらゆる個々の視点が、さまざまな事例を一堂に列挙することによって、方法的に解明される。すり替えられた碑文の場合の批判的方法の模範は、論文「マルタのまがいものの碑銘について」De titulis Melitensibus spuris (1832)に含まれている (『小品集』第4巻, 362頁以下)。

⁶² [原注] 『ギリシア碑文集成』第1巻, XV。

うに校正され修正された (διόρθωσις) ののである。これを行う際に適用された文法的目印の多様性は、高度の正確性を推論せしめる。ひとは行数を数えることすらしたのである。この「行分け法」(Stichometrie)⁶³ に関しては、リッチェル『アレクサンドリアの図書館』⁶⁴ および1840/41年のボン大学講義目録における補遺⁶⁵ [Opuscula I, 74ff. 173ff.] を参照されたい。ローマ人の間ではケケローの時代に、書写人や口述筆記人による本の複製という工場生産方式の企業が始まる。これはしばしば入念な校正を欠いていた。しかしここでもやがて文献学者 (Grammatici) [文法学者] の監督の下での正確な修正 (recensio) [検査] が導入され、そして4, 5世紀になると名望のある政治家ですら、古典的作品の写しを校訂することに従事した。かくして多数の写^{マニユスクリプト}本にはいまなお emendavi [修正済み], correxi [訂正済み], recensui [検査済み], contuli [参照済み] 等々のしるしのついた古代の校正者の署名が見出される。ヤーン「ローマの古典的著作家の写本における奥付について」⁶⁶, ハーゼ『ラテン語写本の署名についての論文』⁶⁷, および [アウグスト・ライフアーシャイト 『ラテン語写本の署名についての小論文』⁶⁸ を参照されたい。もちろん中世には、書写人は往々にして無知

⁶³ 散文を意味とリズムに応じた長さの行に分けて書く、句読点の発達しなかった時代の書記法で、古代には一般的にこの方法が通用していた。

⁶⁴ Friedrich Wilhelm Ritschl, *Die alexandrinischen Bibliotheken unter den ersten Ptolemäern und die Sammlung der nimerischen Gedichte durch Pisisstratus* (Breslau: Georg Philipp Aderholz, 1838).

⁶⁵ [原注] 『小品集』第4巻, 534頁参照。

⁶⁶ Otto Jahn, “Ueber die Subscriptionen in den Handschriften romischer Klassiker,” in *Berichte der Königlichen sächsnischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig, philologisch-historische Klasse*, Bd. 3, Leipzig, 1851, 327-72.

⁶⁷ Friedrich Haase, *de latinorum codicum manuscr. Subscriptionibus commentatio*, in *Breslauer Lectionskatalog* (1860-61).

⁶⁸ August Reifferscheid, *de latinorum codicum subscriptionibus commentarium*, in *Breslauer Lectionskatalog* (1872-73).

な日雇い人夫であったり無学な修道士（修道女も含む）であったりして、彼らは自分たちが消化すべき課題を、部分的には罪ノ罰トシテ (pro poena peccatorum) 書き写したし、あるいは文書室で彼らに口述筆記されたのである。それゆえ、これによってテキストが非常に損なわれたに違いない、とひとは思うであろう。だが、写本は通常あらゆる文法的目印をつけて形式的に筆写されたのであり、こうした文法的目印はそのようにおのずから最初の印刷へ移行した。口述筆記はビザンツ帝国ではきわめて稀であった。それゆえ、もしひとがまさにギリシアの著作家を扱う際に、筆記者が口述筆記する際に一定の音を取り間違えたという前提の上に、形式的・批判的な体系を基礎づけようとすれば、辻褄が合わないことになる。例えば、アウグスト・ラフォンテーヌ⁶⁹がアイスキュロスの版（ハレ、1822年）でこうしたことを試みている。しかしアイスキュロスは口述筆記するにはあまりにも難しいので、間違いなくまったく一度も口述筆記されたことがない。もちろん、ひとは口述筆記者によってミスが生じたという可能性をつねに考慮に入れなければならない。このことは例えばアリストパネースのラヴェンナ写本によって証明されている。コック「アリストパネースの『雲』の修正について」⁷⁰を参照。ビザンツ帝国の末期頃、多くの学識ある人々がふたたび筆写に従事したので、したがってあらゆる時代を通じて筆写人における入念さの欠如を過大評価することは許されない。かなり多くの場合に、書き損じが筆写人に起因するのか、それとも著者に起因するのかどうか、ということも決定され得ない。さらに、若干の間違ひは、それに従って書き写されたところの元の写本が、かび、虫食い、引きちぎれ、等々といった外的影響によって損なわれており、その結果その書物がぼやけ、欠落が生じ、頁が取り違えられた、等々の事実から説明され得る。例えば、アリストテレスの原写本はすでに古代においてそのような運命をたどって

⁶⁹ August Lafontaine (1758-1831)。

⁷⁰ Theodor Kock, „de emendatione Nubium Aristophanis,“ in *Rheinisches Museum für Philologie* Bd. 8 (1853), 341-363.

いる。しかしもちろん、最も古い時代から最も新しい時代に至るまでの、すべての写本のなかに大なり小なりの書き損じが見出される。そしてこれらの書き損じの発見は、持続的に起こる書き損じの種類に注意深くなるときに、容易になる。そうしたミスは3つの主要形式に還元され得る。すなわち、取り違い、脱落、そして付加である。最も頻繁に起こる取り違いは、個々の文字の代わりに他の似かよった文字が書かれること (permutatio litterarum [文字の取り換え]) に存している。これはとくに元の文字が判読できないときに起こるか、あるいはテキストのなかに似かよった特徴が直前ないし直後に存在するときに起こる (repetitio [反復] と anticipatio [先入見])。例えば、G・H・シェーファーが彼の編集した『グレゴリウス・コリンティウス』⁷¹の版において過度に行っているように、多くの人々は内的基準によって強いられもせず、そのようなうっかりミスを前提する。その場合、ひとはまたいかなる時代に間違いが生じ得たのかを調べる必要がある。ギリシアの著作家の場合には、例えばバスト『古文書学的論攷』⁷²が上述のグレゴリウスの版への付録として提供しているような手引きに従って、ギリシアの記述者の斜体文字を根拠にして単純に結論を導き出すことは許されない。G・ヘルマンが述べているように、その種の批判は、ごく少数の写本しか存在していない文字作品には、見事に適用され得る。相互に独立した多数の写本が存在する場合には、そのような間違いがすべての写本のなかに一致したかたちで広まったという蓋然性は消失する。例えば、ホメーロスやピンドロスといったような非常に古い著作家の場合、文字の取り換えは非常に古い時代にときたま起こっている。そこでひとはその場合、古いギリシアのアンシアル字体⁷³を基礎に据えなければならな

⁷¹ Gottfried Heinrich Schaefer, *Gregorius Corinthius* (Leipzig: Weigel, 1811).

⁷² Friedrich Jacob Bast, „*commentatio palaeographica*,“ in G. H. Schäfer, *Gregorii Corinthii et aliorum grammaticorum libri de dialectis linguae Graecae* (Leipzig, 1811), 701-861.

⁷³ 古代ギリシア・ローマの丸みを帯びた筆写書体。

い。その後プトレマイオスの時代に、アンシアル字体と斜体との中間をなす大きな丸文字が発展した。この時代には、斜体文字から説明できないような間違いは、あまり生じなかった⁷⁴。筆記者の精神においては、似た響きのする文字、音節、あるいは言葉の特徴は、ある音形成物が他の音形成物へと紛れ込むことによって、ときたま混乱を惹き起こし取り違えられる。文字要素の場の取り違い (transpositio) [転置] はより稀であるが、これには様々な原因があり得る。例えば、言葉や文字が原文のなかに事後的に挿入され、そしてその結果として、筆写人によって間違った箇所に記入されていることもあるし、あるいは筆記者があるものを落としてしまい、その後の記入の際にミスを犯している、等々のこともある。G・ヘルマン「言葉の転置による修正について」⁷⁵ を参照されたい。脱落は、目が1つの言葉から後代の似かよった特徴へと逸れて、それゆえその間に存在しているものを見落とすことによって、主として生じる。これは2つの隣接している言葉が同じ始まりないし終わりをもっているとき (ὁμοίωμα⁷⁶ と ὁμοιοτέλευτα⁷⁷)、あるいは同一の言葉が短い間隔で繰り返されるときに起こる。さらに、二重に書かれた文字、音節、あるいは単語はしばしば単純に複写される (Haplographie [重字誤脱]⁷⁸ ないし Hemigraphie⁷⁹)。数行

⁷⁴ [原注] ピンダロスの詩歌の批判的取扱いについては、『小品集』第5巻、369頁以下を参照のこと。

⁷⁵ Gottfried Hermann, „de emendationibus per transpositionem verborum,“ 1824; auch abgedruckt in: ders., *Opuscula*, Bd. 3, 98-112.

⁷⁶ ホモイオアルクトン (ὁμοίωμαρκτοι) の複数形。ホモイオアルクトンは “like-beginning” ないし “Anfangsgleichheit” の意味。

⁷⁷ ホモイオテレウトン (ὁμοιοτέλευτοι) の複数形。ホモイオテレウトンは “like-ending” ないし “Endungsgleichheit” の意味。

⁷⁸ Haplographie はギリシア語の形容詞 ἀπλοῦς [1. single 2. simple] と名詞 γραφή [1. that which is drawn or painted 2. that which is written] から作られた合成語で, “fehlerhafte Auslassung eines von zwei gleichen od. ähnlichen Lauten od. Silben in geschriebenen od. gedruckten Texten”,

飛ばされたり、それどころかときには数頁飛ばされたりする。これに付け加えられるのは、筆記する際に何らかの観念の連想によって筆記者の意識に上るところの、個々の筆跡である。文字、音節、言葉、および行全体が往々にしてダブって記される(Dittographie〔重複誤写〕)。さらに、行間の注釈や欄外の注釈が誤って本文のなかに受け入れられる。それによって、同一の事柄に対して2つの、それどころか3つの表現が、相互に並存することが起こり得、そしてしばしば後代の修正において、まさに元々のものが削除される。批評家はここで、注解者たちは通常いかなる表現に奉仕しているのかを、例えば彼らがかなり稀少な言葉を誰にもわかるどのような言葉によって説明するのかを、知らなければならない。かくしてピンドロスの『ピュティア祝勝歌集』第1巻52においては、ここではいかなる写本も役に立たないが, μεταλλάσσοντας という言語要素の代わりに μεταμείβοντας と記されるべきである⁸⁰。これについてはその他の点でしばしば間違っている次の規則が当てはまる。すなわち、「より難解な読みがより平易な読みに優先されるべきである」(lectio difficilior praeferenda facilliori)。けれども、写本が言語要素以外にもととの形を保存していない場合には、ここで決定が下され得ることは稀である。例えば、プラトンの『法律』第11巻931cにおいてそうであり、そこでは βλαβερός の他に元々の ἀρραίος が保存されている⁸¹。オランダ人たちはしばしば校訂の欲(pruritus emendandi)によって、通常の、つまり彼らが注釈的要素として退けた形の代わりに、より稀少な形をはめ込んできた。一般的に、偶然あるい

つまり同一または類似の重なり字を誤って書き落とし、または組み落としすることを意味する。わが国では通常「重字誤脱」という訳語が充てられている。

⁷⁹ Hemigraphie はギリシア語の形容詞 ἡμίσιος(half) と名詞 γραφή から作られた合成語であるが、これにいかなる訳語が充てられるかは寡聞にして知らない。

⁸⁰ [原注] 『ピンドロス全集』第1巻、第2部、437-438頁参照。

⁸¹ [原注] 『一般にプラトンが著者であると信じられている『ミーノース』とプラトンの『法律』第1巻に対して』、191頁参照。

は間違いによって生じた誤りを嗅ぎつける際に、ひとは単なる可能性に夢中になってはならず、またそれに基づいていかなる内的根拠も存在しない変更を企ててはならない。しかし逆に、内的批判によって要求される変更を施す際に、必ずしもは、真理には規則と統一性があるが、それに対して誤謬と偶然には規則がなく、それゆえつねにその内的起源にまでは追跡できないからである。

しかし文字作品のもともとの形は、意図的にもさまざまに変更されてきている。筆記する人は、何かが自分たちに理解できないか、あるいは正しくないと思われるとき、そして読解困難な言葉を省くとき、権限のないやり方で変更を施す。さらに、かなり多くの書物が様々な理由から意図的に改竄されてきた。しかし最後に、ひとはその作品を改良するためにも変更を施してきた。著者あるいは著者以外の人々が改良された版 (διασκευή [新版]) を整えた。古い時代には、伝承されてきたテキストが損傷されているように思われたとき、批評家はそれを校訂した。写しの校正者もこれを行ったので、その結果 διόρθωσις [訂正] と recensio [検査] という表現は批判版と同義的である。このような改良された版とされているものは、実は往々にして頽落した版であるが、真正性の見かけで覆われているので、容易にはそれと認識され得ない。外的な影響によって古代にすでにひどく損なわれていた作品においては、当然のことながらいろいろな校訂が最も有害な影響を及ぼしてきた。かくしてアンドロニーコス⁸²が編集して以来、アリストテレスの書物に関して、古代において様々な仕方であれこれと改良がなされており、そして中世は全体を通じてそれを継承してきた。最初の学識ある出版社もまたしばしば強度の校訂を施した。その際ひとがいかにか勝手に気ままに処理してきたかを、例えばショウ⁸³の『批判的書簡——1通は

⁸² Andronikos, Ἀνδρόνικος。紀元前1世紀のギリシアの哲学者。ロードス島の人。逍遙学派に属し、アリストテレスから数えて10代目の学頭。アリストテレスの写本に注釈を施して整理・公刊したことで知られる。

⁸³ Nicolaus Schow, od. Niels Iversen Schow (1754-1847)。

ハイネに、もう1通はテュクセンに宛てた——』(四折版)⁸⁴が、ムスルス⁸⁵によって写本から整えられたヘーシュキオスの初版本⁸⁶で証明している。

以上に述べたこれらすべての影響から、古代の文字作品は、もしそれが単に1つの写本で保存されていないならば、複数の様々な異文で存在しているということ(Varietas lectionis)が明らかになる。それぞれの異文は歴史的な所与である。こうした所与の小さな事実から1つの全体を形づくること、つまりテキストの歴史一般と、懸念が起り得る各々の個々の箇所が、同時に含まれているような全体を形づくるのが、肝要である。そのような還元成功に過ぎず、ひとは確実にテキストのもともとの形を見出しているはずである。いまや異文の歴史的源泉は以下のとおりである。

1. 作品そのものの写本(libri manuscripti, codices)。2. 基礎となっている写本が知られていないときには、最古の印刷物(editiones principes)。3. 知られざる写本に従って仕上げられた、筆記されたあるいは印刷された翻訳本。4. 古い写本からの異文がそこにおいて証言されている、古代人の注釈(Scholien)。5. 他の古代の著作家におけるその作品の引用。われわれは、いかなる視点に従ってここからテキストの歴史が獲得され得るかを、手短かに示しておこう。

1. 異文の最古の典拠は一般的に古代人の引用であるので、われわれはそこから始めよう。もし古代の著作家が1つの箇所を一定の異文で引用し

⁸⁴ Nicolaus Schow, *Epistolae criticae, una ad Heynium, altera ad Tychsenium* (Rome: A. Fulgonius, 1790). なお、ここで言及されているハイネとは Christian Gottlon Heyne (1729-1812) のことであり、テュクセンとは Thomas Christian Tychsen (1758-1834) のことである。

⁸⁵ [伊] Marco Musuro [羅] Marcus Musurus (c.1470-1517)。ギリシアの学者。多くのギリシア古典を校訂、刊行したことで知られる。

⁸⁶ ここで「初版」と訳したラテン語は editio princeps (複数形 editiones principes) —— ベークは略したかたちの Ed. princ. と記している —— であるが、これは以前には手稿本においてしか存在しなかった作品の最初の印刷本のこと。

ているとすれば、彼はそれによって、その箇所が彼の目の前にある古写本 (Codex) のなかにそのように存在していたことを証言している。もし他の根拠がその信憑性に異議を唱えないとすれば、この証言はその古さゆえに高度の古文書学的価値を有している。例えば、ホラーティウスの『談論集』第1巻、1、100 にとって、fortissima Tyndaridarum という異文は疑わしかった。ヨハネネス・クレリクス⁸⁷ はこの上なく不幸な仕方でもこれを校訂した。ここではまさにその言葉をそのごとく引用している (IX. 4, 65) クィンティリアヌスの完全な効力をもつ証言が決定する。クィンティリアヌスは確実に良質な写本を目にしていたのである。明確な引用と同様に尊重されるべきなのは、古代の文法家たちの多くの引証である。そこでは引用された箇所そのものが表示されてはいないが、何が意図されているかについて、いかなる疑念も存在しない。例えばアイスキュロスの『供養する女たち』*Choephores* 第5巻 419 において、G・ヘルマンはそれ以前に受け入れられていた異文 *πολεμιστριάς* の代わりに、正当にもヘーシキオスの異文 *ιηλεμιστριάς* を採用した。まったく同じように、模作は原作の異文の証拠を与えることができるか、あるいは逆に — この異文が確固たるものであれば — みずからそれにしたがって校訂されることができる。ここからして、ひとはある著作家の批判的研究を行う際に、古代の引用のすべての貯えを探し求めなければならない、ということが帰結する。このやり方はしばしば最も確実な結果へと導かれる。エウセビオスは、例えば『福音の準備』において、プラトンの非常に素晴らしい写本を利用している。彼がそこから提供する多くの引用は、プラトンのテキストの確定にとって最良の古写本の価値を有している。同様にストバイオス⁸⁸ は古代の異文の

⁸⁷ Johannes Clericus (1657-1736)。

⁸⁸ [希] Ἰωάννης ὁ Στοβαῖος [羅] Johannes Stobaeus (生没不詳)。4～5世紀のローマ帝政期のギリシア文集編纂者。400年頃、息子の教育のために編集した全4巻の抜粋ギリシア文集が、不完全ながら『精華文集』*Anthologion* および『選文集』*Eklogai* の名で伝わる。

豊かな鉱床である。ホメロスやプラトンのような、あらゆる時代に読まれかつ利用されている、偉大にして非常に古い著作家においては、いろいろな引用をかき集めてくることは、当然のことながら途轍もなく大きな課題である。ギリシア人だけでなくローマ人もくまなく捜されなければならない。というのは、しばしば遠巻きに仄めかされたことにも、真なるものなお透けて見えることがあるからである。しかしそのような著作家においては、そうした作業に対応した利益もまたある。さて、もしひとがこの種の証言をすべて集めて持っているとするれば、それぞれの証言の批判的価値がふたたび規定されなければならない。それぞれの引用について、そのなかに損なわれた異文すらも潜んでいないかどうか、精査されるべきである。記憶に基づいていい加減に引用されていることも稀ではなく、その場合には容易に間違いが生じる。ときたまある箇所が意図的に変更されて再現されることもある。したがって、そのような場合は可能なかぎりより分けられなければならない。ときたま書写人、印刷屋、あるいは批評家によって、引き合いに出された著作家の受容されたテキストに基づいて、一つの異文が引用文のなかにまず転記されている。プルータルコスの引用文はたびたびそのような記載によって損なわれている。ゲッリウス⁸⁹もまったく同じである。例えばピンダロスの『ピュティア祝勝歌集』第1巻26には、προσιδέσθαιという異文がゲッリウスの証言によって支えられる。しかしよく使われるピンダロスの版に基づく古い印刷本には、間違った異文が入り込んでおり、それによってわたし自身もそそのかされて不当な変更をしてしまった⁹⁰。後1世紀に生きたドラコーン⁹¹の韻律論のなかに、オルペウス

⁸⁹ [希] Aulos Gellios, Ἀύλος Γέλλιος [羅] Aulus Gellius (c.128-c.180)。ローマ帝政期の文法学者。

⁹⁰ [原注]「ピンダロスの詩歌の批判的取扱いについて」『小品集』第5巻369頁参照。

⁹¹ Drakon, Δράκων(生没不詳)。ヘレニズム時代の文法学者(前3～前2世紀)。サッポー、アルカイオス、ピンダロスなどのギリシア詩人の韻律を研究した

の『アルゴナウティカ』*Argonautica* からの引用が見出される。ひとはそこからこの詩がかなり古いものであることを推論した。しかしながら G・ヘルマン (彼が編集したドラコーンの版 [ライプツィヒ, 1812 年] の序文を参照) は、ラスカリス⁹² によるオルペウスの『アルゴナウティカ』からのその引用は、彼みずからがドラコーンのなかにこっそり入れたものであることを指摘した。模作の場合には、2つの手元にある箇所の内いずれが原物であるかは、しばしばわからない。だが、内面的かつ古文書学的根拠に基づいてまず原物が確定されなければならない。それにまた、オランダの批評家たちが非常に頻繁に行っているように、あらゆる一致をただちに模作と見なしてはならない。クリストフ・ゴットヘルフ・ケーニヒ『古代の著作家のなかに突きとめられるべき模倣への過剰な熱望について』(四折版)⁹³ (エルテル編集のケーニヒ『ラテン語小作品』⁹⁴, 132 頁以下に再録されている) を参照されたい。ある箇所に実際に引用文が存在しており、またそこにおいて引用された書物との一致がどの程度に及び得るかを確定したとすれば、その証言の信憑性自体は個人的批判の原則に従って検証されるべきである。

2. 引用文について言えることは、**注釈**(Scholien) についてもまた言える。注釈は非常に古い時代には多くの引用文ほど高みに届いておらず、その起源は部分的には中世の末期にあるとしてもである。それゆえ、ひとはそれらによって遵守されたか、あるいは引き合いに出された異文がいかなる重要性を有しているかを確定できるためには、とりわけその成立年代を規定しなければならない。注釈の**一般的な歴史**は文法的研究の歴史に属し

ことで知られている。

⁹² Konstantinos Laskaris (1434-1501)。

⁹³ Christoph Gottheld König, *De nimia imitationis in scriptoribus antiquis indagandae cupiditate* (Meißen, 1815)。

⁹⁴ Christoph Gottheld König, *Opuscula Latina*, herausgegeben von Friedrich Maximilian Oertel (Meißen: C. E. Klinkicht, 1834)。

ている。しかし批判にとっては、それぞれの文字作品において、テキストの歴史がそれに関連する注釈の特殊な歴史によって補完されることが必要である。スリングルの『ラテン語の注釈の〔批判的な〕歴史』⁹⁵のような一般的な叙述は、この目的のためにはまったく役に立たない。重要な課題は、例えば、ホメロスについての様々な注釈集成の著者を突きとめることである。劇作家にとってこの種の価値のある研究は、ヴンダー『ソポクレスの悲劇における注釈の有効性について』⁹⁶、グスタフ・ヴォルフ『ソポクレスのラウレンティアンの注釈の様々な異文について』⁹⁷、ユリウス・リヒター『アイスキュロス、ソポクレス、およびエウリーピデースのギリシアの解釈者たちについて』⁹⁸、オットー・シュナイダー『アリストパネースのなかの古い注釈の源泉についての論攷』⁹⁹である。全体的には、ラテンの著作家にとってよりもギリシアの著作家にとって、注釈はより重要である。しかしギリシアの著作家にとっても、注釈は価値にしたがえば非常にさまざまである。彼らの一部は古いアレクサンドリアの伝統に基づいているのに対して、多くの著作家たちはビザンツの起源を有している。そしてその起源が新しければ新しいほど、ますます悪くなるという基準が、ビザンツ起源の著作家には無条件で当てはまる。というのは、より後代の解釈

⁹⁵ Willem Hendrik Dominicus Suringar, *Historia critica scholiastarum Latinorum* (Leyden, 1834-35).

⁹⁶ Wunder, *De scholiorum in Sophoclis tragoedias auctoritate* (Grimma, 1838).

⁹⁷ Gustav Wolff, *De Sophoclis scholiorum Laurentianorum variis lectionibus* (Leipzig, 1843). なお、ラウレンティアンというのは、フィレンツェにある11世紀初期の写本の名称で、ソポクレス、アイスキュロス、アッポローニオス・ロディオスなどの貴重な資料を含んでいるといわれる。

⁹⁸ Julius Richter, *De Aeschyli, Sophoclis, Euripidid interpretibus Graecis* (Berlin: Besser, 1839).

⁹⁹ Otto Schneider, *De veterum in Aristophanem scholiorum fontibus commentatio* (Stralsund, 1838).

者はあまり良くない資料を手にしていただけでなく、あまり洞察力と判断力を持ち合わせていなかったからである。もっとも最近の注釈から、例えばソポクレスとピンダロスについてのデーメートリオス・トリクリニオス¹⁰⁰のそれから獲得される異文は、それと一致するテキストが疑わしいと見なされるべきであるというかぎりにおいて、否定的な証言としてのみ認められ得る。それに対して、アレクサンドリア時代に由来する証言は、最高度の注意を払う価値がある。というのは、アレクサンドリアの文法学者たちは最良の古い写本を持っていたからである。かくして例えばソポクレスの『アンティゴネー』第4巻において、解釈が難しい ἄτης ἄτερ という言葉を校訂することはまったく許されない。というのは、ディデウモス¹⁰¹がこの異文に唯一のものとして直面していたからである。

もしひとが — I・ベッカーがプラトンとアリストテレスにおいてこれを行ったように — テキストの批判的確定を行う際に、引用文や古い解釈を顧慮することをせず、写本のみを基礎に据えたとすれば、それは承認されないことである。他者のための材料を一緒に運ぶべきだと要求することは、もちろんなんびとにもできないが、ひとは自分が良いと思うかぎり、自分でそれを行い、そのあとでそれを公表することができる。ベントリーはホラーティウスに関してそのようにしたし、わたしはピンダロスに関してそのようにした。

3. 注釈には古い[˙]パラフ[˙]レーズ[˙]と[˙]翻訳[˙]が[˙]接[˙]続[˙]する。パラフレーズと翻訳は、古代にはまだあまり高みに届いていないので、あまり大きな意義を有

¹⁰⁰ [希] Δημήτριος Τρικλίνιος [羅] Demetrius Triclinus. 1300年頃にテッサロニキ生まれたビザンツの学者で、古代ギリシアから伝わる多くのテキストを編集し、とくにアイスキュロス、ソポクレス、エウリーピデースの韻律構造の分析に功績を挙げた。

¹⁰¹ [希] Δίδυμος, Δίδυμος [羅] Didymus (BC 80/63-BC 10頃)。ギリシアの文献学者・注釈家。アレクサンドリアおよびローマで活躍し、ホメロス以下ほぼすべてのギリシア文学に注釈を施し、辞書や抜粋・金言集を編纂し、また文法や綴字方などについても研究した。

していないが、部分的には相対的に非常に古い異文の証言を含んでいる。キケロー(断片)、ゲルマニクス¹⁰²(大部分に保存)、アウィエヌス¹⁰³(完全に保存)によるアラトス¹⁰⁴の驚異的な出来事¹⁰⁵についての翻訳、キケローとカルキディウス¹⁰⁶によるプラトンの『ティマイオス』についての翻訳[ムルラッハ『ギリシア哲学者断片』第2部¹⁰⁷を参照]、パエアニオス¹⁰⁸によるエウトロピウス¹⁰⁹の言い換えは、そうしたものである。アリストテレスのラテン語翻訳とアラビア語翻訳は、彼のテキストの歴史にとってとくに重要である。ここでは最初の印刷された翻訳本も依然として写本に従って仕上げられている。ギリシア語のテキストはそののちにはじめて印

¹⁰² Germanicus Iulius Caesar (BC 15-AD 19)。ローマの将軍。ギリシア・ラテン双方の学問に通じ、アラトスの天文詩のラテン語新訳やギリシア悲劇の創作なども手がけている。

¹⁰³ Avienus, または Flavius Avianus (4世紀後半～5世紀前半)。ローマ帝政期のラテン詩人。

¹⁰⁴ [希] Aratos, Ἄρατος [羅] Aratus (BC 271-BC 213)。ヘレニズム期のギリシアの代表的政治家・武将。

¹⁰⁵ アラトスが執筆した『追想録』*Hypomnematismoi* (30巻以上、散逸)のなかに出てくる驚嘆すべき数々の出来事を指していると思われる。

¹⁰⁶ Calcidius (生没不詳)。4世紀の学者。ローマ帝政期のプラトンの『ティマイオス』のラテン語訳と注解の著者。ポルピュリオスらの散逸した注解書から豊富に引用しているため、古代後期の哲学的資料として重視されている。

¹⁰⁷ Friedrich Wilhelm August Mullach, *Fragmenta philosophorum Graecorum*, Bd. 2, *Pythagoreos, Sophistas, Cynicos et Chalcidii* (Paris, 1867)。

¹⁰⁸ Paeanios (生没不詳)。エウトロピウスの『ローマ史要録』*Breviarium ab urbe condita*のギリシア語訳の訳者として知られる。

¹⁰⁹ [希] Eutropius, Εὐτρόπιος, [羅] Eutropius (生没不詳)。4世紀のローマの歴史家。皇帝ヴァレンティヌスの委託により、10巻本の『ローマ史要録』*Breviarium ab urbe condita*を執筆した。これは起源から西暦364年までのローマの歴史を扱ったもので、様式的には優れているものの、内容的な独立性は認められないと言われている。とはいえ、中世には教科書として大いに用いられた。

刷されているからである。翻訳が原語に忠実であればあるほど、その古文書学的価値はますます大きい。それゆえ、例えば 13 世紀のメールベッケ¹¹⁰によるアリストテレスのいわゆる *translatio vetus*¹¹¹ はとくに価値がある。翻訳とパラフレーズは、それが厳密に原テキストに接続することが認められるかぎりにおいてにすぎないが、一般的に異文の証拠と見なされ得る。さらに、それがその異文を支持すべきであるところの写本や原本の印刷版に従って、事後的にはじめて形づくられたのではないということ、ひとは確かめなければならない。そこでフィチーノ¹¹²によって同様に原テキストに先立って完成されたプラトンのラテン語訳(初版、フィレンツェ、1483-1484 年頃)であるが、これはもちろん原文の写本を表している。しかし 1532 年以降出版されたこの翻訳の版は、シモン・グリユナエウス¹¹³によって、ギリシア語テキストの一般普及版に従って変更を施されているので、このことによってこのギリシア語テキストの一般普及版に対して、独立した証拠という価値を失ってしまった。

4. さて、著作自体のいろいろな写本は古文書学的批判の本体的対象である。これまで挙げられた、大抵はかなり古い異文の源泉は、同様に写本によって伝承されており、そしてその証明力はこうした写本の信頼性に基づいている。写本の古文書学的価値は、写本が由来する当のものが真正なるものを提供しようと意図しているかどうか、また提供できるかどうか、およびどの程度そうであるか、またあり得るか、ということにかかっている。

¹¹⁰ Willem van Moerbeckem または William of Moerbecke (1215-c.1286)。哲学書、医学書、科学書などをギリシア語からラテン語に翻訳したことで知られる。

¹¹¹ *translatio vetus* は、字義的には「古い翻訳」の意味。

¹¹² [伊] Ficino Marsilio, [羅] Marsilius Ficinus (1433-1499)。イタリアの人文学者。メディチ家のコシモの庇護の下にプラトン、プロティノス、プロクロスなどの著書をラテン語に訳し、またフィレンツェに設立されたアカデミアの学長として一世を風靡した。

¹¹³ Simon Grynaeus (1493-1541)。宗教改革期のドイツの学者・神学者。

る。それゆえ、つねにまず全体的および個別的に、歪曲が潜んでいないかどうか調べられなければならないが、これは個人的批判によって決定されるべき事柄である。しかし写本がそれへと遡源されるべき当のものが、どの程度真正なるものを提供できるかは、部分的にはその洞察力に、また部分的には外的諸条件に依存している。洞察力に関しては、学識のない人がしばしばより優れた証人である。筆写人あるいは校正者の愚鈍が諦念的な謙虚さと結びついているとき、その愚鈍は往々にして真理を保証する。しかしそれがうぬぼれと結びついているとき、小生意気な性格は最も腹立たしい混乱へと導かれる。もちろんかなり多くの事柄を、例えば難しい韻律を、正しく再現するためには、とりわけオリジナルな写本が読めない場合には、判断力が必要である。そして批判はそれゆえ、単純さに信頼を置けるところと、真正なるものの保持がより深い洞察力によって制約されているところとを、つねに区別しなければならない。しかし最良の洞察力をもっていても、誰も自分に伝承されたものしか与えることができない。通常は、より古い古写本がより信頼できるが、それはより良い源泉から流れてきているからである。にもかかわらず、このことは次の事実によって非常に限定される。すなわち、すでに古代において、そしてまったく同じようにのちの時代にも、同一の著作についてしばしばより良質な版とより悪質な版が、そしてより良質な写本とより悪質な写本が、互いに並存したので、その結果良質の古い版に遡るより新しい写本の方が、より悪質な源泉に由来するより古い写本よりも優れていることだってあり得るということである。しかしいずれにせよ、こうした事態を明確にするためには、われわれの目の前にある写本の成立年代をできるだけ規定することが必要である。同じことは往々にして筆写人と校正者の署名から見て取ることができる。上で(原文191頁)言及された、古代自体ではあってもより後代に由来する奥付によって、われわれは例の奥付がそこからわれわれの写本に至るまで伝承されてきた、その古い校訂をすら類推することができる。しかし写本に日付が含まれていないところでは、ひとはその写本の成立年代を筆記材料と文字から規定する必要がある。

最古の保存されている写本の筆記材料はエジプトのパピルスである。われわれはギリシアのアンシアル字体で書かれたパピルスの巻物と冊子をもっている。本には通常このアンシアル字体が用いられたが、当時は一般的に記録文書には久しく斜体文字が使用された。紀元前2世紀の初めまで遡るエジプトで発見された様々な写本はここに入る。1821年に『イーリアス』の最後の巻の大きな断片がエレファント島で発見され、イギリス人のバンクス¹¹⁴によって入手された(『文献学的博物館』¹¹⁵第1巻(ケンブリッジ, 1832年)に掲載されたファクシミリ [ヴァッテンバハ「ギリシア文字の石版1」¹¹⁶]。それはその古い成立年代にもかかわらず、テキストの批判にとっては価値がない。さらに、きわめて多数の『イーリアス』の断片、アルクマーン¹¹⁷の断片, Εὐδόξου τέχνη¹¹⁸ [エウドクソスの技芸](2世紀初め)という天文学的著作の写本, およびエジプトの墓から発掘されたヒュペレイデース¹¹⁹の演説の重要な断片¹²⁰が、巻間に引き出されている。[H・ウェイク『アンプロワーズ・フィルティン=ディド氏の蔵書の未刊行のパピルス写本—エルリピデスと他のギリシアの作家の新しい断片—』¹²¹(パリ, 1879年)(ファクシミリ付き)]. A・キルヒホフ「エジプト

¹¹⁴ William John Bankes (1786-1855)。

¹¹⁵ *The Philological Museum* (Cambridge, 1832-33)。

¹¹⁶ Vgl. *Schrifttafeln zur Geschichte der griechischen Schrift und zum Studium der griechischen Palaeographie*, herausgegeben von Ernst Christian Wilhelm Wattenbach (Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1876)。

¹¹⁷ Alkman, Ἀλκμάν (前7世紀後半) ギリシアの抒情詩人。

¹¹⁸ [原注] [拙著]『古代人の4年間の太陽の周期』*Ueber die vierjährigen Sonnenkreise der Alten* (ベルリン, 1863年)の第10章「エウドクソスのパピルス」を参照のこと。

¹¹⁹ Hypereides, Ὑπερείδης (BC 390/389-BC 322)。アテーナイの雄弁家・政治家。

¹²⁰ [原注]「新しく発見されたヒュペライデスの演説の断片」(1848年)(『小品集』第7巻, 518-572頁)を参照のこと。

¹²¹ Henri Weil. *Un papyrus inédit de la bibliothèque de M. Ambroise Firmin-*

から出土したエウリーピデースの写本の残りのものについて」『ベルリン科学アカデミー月報』(1881年)¹²² 参照。] 1753年にヘルクラネウムで発見された1756年の巻物¹²³は、まず小さな部分が広げられと解読されている(『ヘラクラーネウムの巻物の残存している巻』1-11巻(ナポリ, 1793-1855)¹²⁴; 『もう一つのコレクション』¹²⁵ 第1巻[1862年], 第11巻[1876年])。そのなかでとくに重要なのは、エピクーロス派のピロデーモス¹²⁶の書物(ザウップとゴムペルツによる版)である。さらに、われわれは最も古く見積もっておそらく紀元前160年、最も新しく見積もれば紀元後7世紀の公文書、書簡、等々を含む、ギリシア語の斜体文字で記されたパピルスの写本¹²⁷をもっている。ヘルクラネウムの巻物のなかには、最

Didot. Nouveaux fragments d'Euripide et d'autres poètes grecs (Paris: Librairie de Firmin-Didot, 1879).

¹²² Adolf Kirchoff, „Über die Reste einer aus Aegypten stammenden Handschriften des Euripides,“ in: *Monatsberichte der Königlich-Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin* (Aus dem Jahre 1881), (Berlin: Buchdruckerei der Kgl. Akademie der Wissenschaften, 1882), 982-989.

¹²³ ヘラクラーネウムは、イタリア半島西南部、カンヴィパーニアの沿岸都市。ナポリから東南約8 km、ポンペイとの中間に位置する。79年のヴェスオス火山の噴火でポンペイなどとともにすっかり地中に埋没した。18世紀初頭から発掘が行われ、多数の美術品をはじめ、公共建造物や家屋なども出土したが、とくに「パピルス荘」(Villa dei papiri) と呼ばれる邸宅からは、ピロデーモスの作品を含む1803巻のパピルスが発見されている。

¹²⁴ *Herculaniensium voluminum quae supersunt tomi*. Teil I-XI (Neapel: Regia Typographia, 1793-1855).

¹²⁵ *Herculaniensium voluminum quae supersunt collection altera*. Bd. 1-11 (Neapel: e Museo publico, 1862-76).

¹²⁶ Philodemos, Φιλόδημος (c.BC 110-c.BC 37)。シリア出身の詩人、エピクーロス派の哲学者。

¹²⁷ [原注]「ギリシア語の斜体文字でパピルスに記されたエジプトの古文書の解釈」(『小品集』第5巻, 206-247頁)を参照のこと。

古のラテン語の写本、つまり大文字で記されたアクティウムの戦いを詠った詩の断片が見出される。さらに、ラテン語のアンシアル字体と斜体文字で記されたパピルスの冊子本が含まれている。これは最も新しく見積もって10世紀か11世紀に成立したものである。[ガルトハウゼン『ギリシアの古文書学』¹²⁸ 35頁以下参照。]パピルス写本の文献に関しては、エンゲルマン『古典著作家叢書』¹²⁹のなかの「パピルス」の項目記事を参照。[フロイント『文献学の三年』¹³⁰、第4部、第2版、201-202および225-226頁]。

ペルガモンでその仕上げ加工が発明されて以来、パピルスと並んで羊皮紙(Περγαμηνή διφθέρα, membrana)が古代には用いられた。しかし保存された羊皮紙の写本は大半のパピルス写本よりも新しい。最古のものは紀元後3-5世紀に由来している。すでに古代において、パピルスと羊皮紙に書かれた文字は、その素材を新しい写本のために活用するために、頻繁に洗い落とされたり擦り取られたりした。こうした写本はその後パ・リ・ム・プ・セ・ス・ト(Palimpseste) (βιβλία παλίμψηστα, libri rescripti)¹³¹という。キリスト教の時代には、教会の書物を書きとどめるために古写本が使用されたので、こうしたやり方で多くの古い著作が破壊された。逆に、教会の書物をそこから抹消した羊皮紙に、もちろん古代の作家のテキストや他の世俗の書物が書かれたりもしている。その結果691年には、聖書や教父の書物を擦って破壊することが、クィニセクストゥムの教会会議(Synodus

¹²⁸ Victor Gardthausen, *Griechische Palaeographie* (Leipzig: Teubner, 1879).

¹²⁹ Wilhelm Engelmann, *Bibliotheca scriptorum classicorum*. 8. Aufl. (Leipzig: Verlag von Wilhelm Engelmann, 1880).

¹³⁰ Wilhelm Freund, *Triennium philologicum oder Grundzüge der philologischen Wissenschaften für Jünger der Philologie zur Wiederholung und Selbstprüfung* (Leipzig: Violet, 1875).

¹³¹ パリムプセストとはもともと書かれていた文字を消して再使用したパピルスまたは羊皮紙による写本のことである。その名称そのものはギリシア語の βιβλία παλίμψηστα に由来するが、libri rescripti というラテン語と同様、それは「書き改められた書物」を意味している。

Quinisexta) で禁止された¹³²。パリムプセスト上では、もともとの文字の痕跡を完全に消すことができなかつたので、近代においては多くの場合にこの文字を再現することに成功した。前世紀にはすでに幾つかの重要な断片がパリムプセスト上に発見された。しかしわれわれの世紀には、こうした仕方でも最高に重要な発見が、まずアングロ・マイ¹³³、ペイロン¹³⁴、およびニープールによってなされている。ひとは「二度書き改められた書物」(libri bis rescripti) をすら解読した。『リキニアヌスの年代記の残存部分。三度書かれた古写本から』¹³⁵ を参照されたい。消し去られた筆跡を再現するために化学的試薬が用いられてきたので、もちろんこれによって貴重な写本も台無しになった。モネ『ギリシア語ならびにラテン語の書き改められた書物について』¹³⁶ を参照されたい。発見されたラテン語のパリムプセストの書物の大半は、7-9世紀に書き改められたものである。

10世紀以降、木綿製の紙 (charta bombycina) が、14世紀以降、リンネルの紙 (codices chartacei) が一般的に使用されている。後者の場合に

¹³² ベークのテキストでは691年となっているが、正確には692年が正しい。なお、クィニセクストゥムとは「第五・第六」の意味。

¹³³ Angelo Mai (1782-1854)。イタリアの古典学者。イエズス会士。ヴァティカン図書館長 (1819-25)。枢機卿 (1838) となる。古写本の判読にすぐれ、キケローの《De re publica》、ハリカルナッソスのディオニューシオスの《ローマ史》、フロントの書簡、プラウトゥスの断片など多くの新しい資料を読解・整理した。

¹³⁴ Amedeo Peyron (1785-1870)。コプト語の研究者として名を馳せ、ギリシアの写本研究でも非常にすぐれた功績を挙げた。代表的著作に *Lexicon Linguae Copticae: Studio* (Taurini: ex Regio Typographeo, 1835) や *Grammatica Linguae Copticae. Accedunt Additamenta ad Lexicon Copticum* (Taurini: ex Regio Typographeo, 1841) などがある。

¹³⁵ *Gai Grani Liciniani annalium quae supersunt ex codice ter scripto*. ed. Karl August Friedlich Pertz (Berlin: Georg Reimer, 1857)。

¹³⁶ Fridegar Mone, *De libris palimpsestis tam latinis quam graecis* (Karlsruhe: G. Braun, 1855)。

は、紙の透かし模様は同時に年代を規定するための徴表である。そこで、例えばキルヒナーの『新しいホラーティウスの問題』(四折版)¹³⁷は、それにしたがってホラーティウスの写本の年代を規定している。ゴットヘルフ・フィッシャーの『紙の透かし模様を古代学の特徴として利用する試み』¹³⁸を参照のこと。[エチエンヌ・ミドゥーとオーギュスト・マトンの『14世紀と15世紀のフランスで用いられた紙の透かし模様に関する研究— 600枚の石版画像付き —』¹³⁹参照。]

さまざまな種類の筆記素材を区別することは容易い。但し、より新しい時代の木綿製の紙の区別はときたま困難をとまなう。より難しいのは古写本の年代を文字によって規定することである。だが、たとえ幾つかの移行期に、例えば9-11世紀におけるラテン文字におけるように、文字が長らく揺れ動きはつきり決められていないとしても、一般的にあらゆる世代の筆跡は特徴的な相違を示している。すぐれた古文字学者は最古の時代から現代に至るまでのあらゆる文字の歴史を立証し、そして文字の形が次第に移行するさまを記載することができる。それにまた、正字法、アクセント法、句読法における、あるいは略字法における一定の慣習が存在し、そこから写本の成立した時代を類推することができる。けれども、これらの事柄に関しても、最大の注意をもって処理しなければならない。ときおり古い時代の文字の特徴が、愛好ゆえにあるいは欺瞞的な意図から、模倣されてい

¹³⁷ Carl Kirchner, *Novae Quaestiones Noratianae* (Nürnberg: In libraria Hahniana, 1847).

¹³⁸ Gotthelf Fischer, *Versuch die Papierzeichen als Kennzeichen der Alterthumskunde anzuwenden* (Nürnberg: Ioh. Leonh. Sixt. Lechner'sche Buchhandlung, 1804). なお、ベークのテキストでは誤って書名が *Versuch die Papierzeichen als Kennzeichen des Alterthums anzuwenden* となっているので要注意。

¹³⁹ Etienne Midoux et August Matton, *Etudes sur les filigranes des papiers employés en France au XIVe et Xve siècles. Acc. De 600 dessins lithographiés* (Paris: M. A. Éditeurs, 1868).

る。古写本にはさらにしばしば、さまざまな時代のさまざまな人の手によって書かれた、さまざまな部分がある。同一の古写本が同一の原典から書き写されてはいないことすら可能である。欠損箇所や破損された頁は、さまざまな人の手によって補完されていることが稀ではない。ひとは削除箇所に関して、それらが1人の人かあるいは複数の人に由来するか (*rasura a manu prima et secunda* [第1と第2の手による削除]) を区別しなければならない。筆跡、インク、紙などの相違や、冊子の保存状態の善し悪しが、この場合通常は十分満足のいく特徴をもたらす。これらすべてのことをひとは訓練によって根本的に学ぶことができる。いろいろな写本の異文を1つにまとめること(原文との校合)は、それ以外の点では非常に価値のあることであるが、ただそれだけからは批判のために必要な古文書学的知識は獲得できない。そのためには独自の直観と古文書学的な古文字学の知識とが必要である。

文献

トゥスタインとタッサン『新しい古文書学概説』¹⁴⁰ 全6巻(四折版)(最後の5巻はより中世を対象としている)。— ガッターラー『古文書学の普遍的技術の基礎』(四折版)；『ゲッティンゲン王立科学協会論文集』所収の「古写本の年代を確定する方法についての古文書学的論文」；『古文書学の概要』¹⁴¹。— モントファウコン『ギリシアの古文字学』(二折版)¹⁴²(必ずし

¹⁴⁰ Toustaine et Tassin, *Nouveau traité de diplomatique*, 6 Bde. (Paris: Guillaume Desprez, 1750-65).

¹⁴¹ Johann Christoph Gatterer, *Elementa artis diplomaticae universalis* (Göttingen: Vandenhoeck, 1765); ders, „commentatio diplomaticae de methodo aetatis codicum manuscriptorum definiendae,“ in: *Commentationes Societatis Regiae Scientiarum Göttingensis* 8 (1787); ders, *Abriss der Diplomatik* (Göttingen: Vandenhoeck, 1798).

¹⁴² Bernard de Montfaucon, *Palaeographia graeca, sive de ortu et progressu litterarum Graecarum, et de variis omnium faeculorum Scriptionis*

も根本的ではないとしても、包括的)。— バスト『古文字学的論文』¹⁴³ (原著 192 頁。非常に注目に値する)。— コップ『批判的古文字学』¹⁴⁴ 4 巻本 (四折版) (詳細かつ学識に富む)。— エメ・シャムポリオン『パリの王立図書館の最もすぐれた写本による古典ラテン語の古文字学。シャムポリオン— フィジェによる序論付き』 (四折版)¹⁴⁵。— シルヴェストル『普遍的古文字学』¹⁴⁶ 第 2, 3 巻。— [W・ヴァッテンバハ『ギリシア古文字学入門』 (四折版)¹⁴⁷; 『ギリシア文字の歴史およびギリシア古文字学の研究のための文字盤』 (二折版)¹⁴⁸; 『ラテン語古文字学入門』 (四折版)¹⁴⁹; 『中世における文字制度』¹⁵⁰; ツァングマイスターとヴァッテンバハ『やや大きな文字で書かれたラテン語写本の標本』 (二折版)とその補遺¹⁵¹; ヴァッテンバ

Graecae generibus: itemque de Abbreviationibus & de Notis variorum Artium ac Disciplinarum (Paris: Vivarelli & Gullà, 1708).

¹⁴³ Friedrich Jacob Bast, *Commentatio palaeographica* (Leipzig, 1811).

¹⁴⁴ Ulrich Friedrich Kopp, *Palaeographia critica*, 4 Bde. (Mannheim, 1817–29).

¹⁴⁵ Aimé Louis Champollion-Figeac, *Paléographie des classiques latins d'après les plus beaux manuscrits de la bibliothèque royale de Paris, avec une introduction par Champollion-Figeac* (Paris, 1839).

¹⁴⁶ Silvestre, *Paléographie universelle* (Paris, 1841).

¹⁴⁷ Ernst Christian Wilhelm Wattenbach, *Anleitung zur griechischen Paläographie* (Leipzig, 1867; 2. Aufl., 1877).

¹⁴⁸ Ernst Christian Wilhelm Wattenbach, *Schrifttafeln zur Geschichte der griechischen Schrift und zum Studium der griechischen Palaeographie* (Berlin: Verlag der Kgl. Hof-Steindr, 1875–77); I. Abteilung 1875, II. Abteilung 1877.

¹⁴⁹ Ernst Christian Wilhem Wattenbach, *Anleitung zur lateinischen Paläographie* (Leipzig: Hirzel, 1869; 3. Aufl., 1878).

¹⁵⁰ Ernst Christian Wilhem Wattenbach, *Das Schriftwesen im Mittelalter* (Leipzig: Hirzel, 1871).

¹⁵¹ Carl Friedrich Wilhelm Zangemeister und Ernst Christian Wilhem Wattenbach, *Exempla codicum latinorum litteris maiusculis scriptorum* (Heidelberg: Koester, 1876); *Supplementum: Continens Tabulas LI–LXII*

ハとフェルゼン『やや小さな文字で書かれたギリシア語写本の標本』(二折版)¹⁵²。 — J・C・フォルグラフ『古文字学研究』¹⁵³。 — ヴィルヘルム・アルント『講義と自学自習の際に使用するための文字盤』2分冊(二折版)¹⁵⁴。 — ガルトハウゼン『ギリシア古文字学』¹⁵⁵。 — ロイス『ローマ人の速記術について』¹⁵⁶。 — オスカー・レーマン『ギリシア語写本の速記術的短縮』¹⁵⁷。 — W・シュミッツ『パリのラテン語古写本2718の速記術的記念碑』¹⁵⁸(ファクシミリ I (M. 22 Taff.))。 — ビルト『古代の文字制度』¹⁵⁹。 — ボンドとトンプソン『古代の写本のファクシミリ』(アトラス版)¹⁶⁰。]

((Heidelberg: Koester, 1880).

¹⁵² Ernst Christian Wilhem Wattenbach und Friedrich Adolf von Velsen, *Exempla codicum graecorum litteris minusculis scriptorum* (Heidelberg: Koester, 1878).

¹⁵³ Johann Christoph Vollgraff, *Studia palaeographica* (Leyden: S. C. Van Doesburgh 1870).

¹⁵⁴ Wilhelm Ferdinand Arndt, *Schrifttafeln zum Gebrauch bei Vorlesungen und zum Selbstunterricht*, 2 Hefte (Berlin, 1876 u. 1878).

¹⁵⁵ Victor Gardthausen, *Griechische Palaeographie* (Leipzig: B. G. Teubner, 1879).

¹⁵⁶ Ferdinand Reuss, *Ueber die Tachygraphie der Römer* (München: Druck und Verlag von Ernst Stahl, 1879).

¹⁵⁷ Oskar Lehmann, *Die tachygraphischen Abkürzungen der griechischen Handschriften. Mit 10 Tafeln in Lichtdruck* (Leipzig: B. G. Teubner, 1880).

¹⁵⁸ Wilhelm Schmitz, *Monumenta tachygraphica codicis Parisiensis latini 2718* (Hannover: bibliopolio Hahniano, 1882).

¹⁵⁹ Theodor Birt, *Das antike Buchwesen in seinem Verhältniss zur Litteratur* (Berlin: Verlag von Wilhelm Hertz, 1882).

¹⁶⁰ The Palaeographical Society, *Facsimiles of Ancient Manuscripts and Inscriptions* (London 1873-94, with *Indices*, 1901): [First Series] ed. Edward Augustus Bond and Edward M. Thompson, 2 vols. (1873-83), 260 plates; [Second Series] ed. Bond and Thompson with G. F. Warner, 2

5. 古代の文字作品の印刷版は写本に基づいているので、それらは古文書学的批判にとって、基礎となっている写本が知られていないときには、ただ証言としてのみ価値を有している。それゆえ、ひとがふたたび写本へと遡源している現代においては、とくにベッカーの包括的な校合以降、最初の印刷版は大部分価値がなくなってしまうている。しかし、例えばヴィッテンベルクではメランヒトンの監督の下で、学生たちによって訓練のために、写本もまた印刷版に従ってなされた。これはもちろんいかなる古文書学的意義ももっておらず、したがって入念に排除されるべきである。これに対して、使用された写本が知られていない最初の印刷版は、書かれた古文書と同一の権威を有しており、それと同一の原則に従って検査されるべきである。かなり多くの印刷版は単純に写本から復刻され、そしてそれは、当時は通常みずから学識がなくなかった植字工によってすら、しばしば植字されたのであった。別のものは、例えばデーメトリオス・カルコンデラス¹⁶¹のホメーロスのように、たしかに複数の古文書から合成されて1つに纏められている。かなり多くの著作については、相互に独立した複数の初版 (*editiones principes*) が存在している。ピンダロスについて、アルダイン版¹⁶²とローマ版とがあるようにである。よりのちの版は、より古い版を校訂作業によって改良した新しい版 (*recognitiones*) にすぎないか、あるいはより大きな資料集を利用して作り出された版 (*recensiones*) か、そのいずれかである。後者の場合には、われわれに今のところ知られてい

vols. (1884-94), 205 plates.

¹⁶¹ Demetrius Chalcondyles (1424-1511). ギリシア人の教師。1447年にイタリアにやって来て、パドヴァ、フィレンツェ、ミラノで教えた。ギリシア語とプラトン哲学の教師として名高く、またホメーロス (1488年) とイソクラテース (1493年) の最初の印刷版を出版したことで知られている。

¹⁶² 15, 16世紀ヴェネツィアの印刷業者アルドゥス・マヌティウス — [羅] Aldus Manutius [伊] Aldo Mannucci or Manuzio (1449-1515) — が刊行した古典の豪華版。アルドゥス・マヌティウスはアルダイン印刷所の設立者で、みずからも学者ならびに編集者としても活躍した。

ない新しい写本的資料が利用されていないかどうか、調べられるべきである。というのは、それによってこの印刷版は古文学書的な証言の地位を獲得するからである。当然、すべての印刷された版において、編集者の判読による校訂のほかに、一般的に書き写した人のミスに似た印刷ミスが突きとめられるべきである。通常、批判は写本におけるよりも印刷物においてより確かである。なぜならば、編集者にはその版が印刷された日時と場所が知られているからである。しかしこのことは例外なくそうだというわけではない。古い印刷物には印刷の場所と日時の情報が記されていないこと (*sine anno et loco*) は稀ではない。そしてその場合には、写本の場合と同様、年代は外的な特徴から規定されなければならない。これについての必要な手引きは、本の印刷の歴史が提供してくれる。上で(原著52頁)言及した著作を参照。

1つの文字作品に関して、異文の多様性に対して言及される資料が豊富になればなるほど、テキストの歴史を作り出すことにより完全に成功するであろう。とはいうものの、かなり多くの著作に対して、われわれは1つの写本のみを参照するように命じられているので、その結果本物を回復することは、目の前にある唯一の異文に基づく判読による校訂によってのみ可能である。例えば、ウェツレイユス・パテルクルス¹⁶³は、エルザスのムールバハにある写本でのみ保存されている。このムールバハ写本 (*Codices Murbacensis*) は、それにしたがえばベアトゥス・レナヌス¹⁶⁴が最初の版(バーゼル, 1520年, 二折版)の世話をしたのであるが、それはのちに紛失されてしまい、アームルバハ¹⁶⁵による写しのみがバーゼルに保存されてい

¹⁶³ Velleius Paterculus (c.BC 20/19-AD 31 後)。ローマ帝政初期の歴史家。

¹⁶⁴ Beatus Rhenanus (1485-1547)。ドイツの人文学者。エラスムスの親友・批評家、出版社として知られている。

¹⁶⁵ Bonifacius Amerbach (1495-1562)。バーゼルの法学者、美術品蒐集家。エラスムスの友人でその相続者。バーゼルの印刷業者 Johannes Amerbach (c. 1445-1514) の息子。

る。それをアーメルバハの写本 (Codex Amerbacensis) という。[それに加えて、われわれはブーラー¹⁶⁶ によってムールバハ写本とレナウスの版とが校合されたものを一部所有している。] ここで読み方の多様性 (varietas lectionis)¹⁶⁷ は、両方の写しとも不完全であり、それゆえ相互に相違しているという事実によってのみ存在する。しかしわれわれがもっと多くの写本を持っているとすれば、これらの写本はまず厳密に比較されるべきである。その際、間違いにおける非常に大きな一致、とくに外的影響によってのみ説明されるべき間違いにおける一致が明らかになるので、ひとはある共通の基根となる古写本 (codex archetypus) を前提せざるを得ない。同時に、目の前にあるいろいろな写本の年代や成立の仕方を測る基準に留意することで、やがてこれらの1つが祖型であるのか、それともこの祖型が失われてしまっているのかが判明する。かくしてザウツペ『G・ヘルマン宛の批判的書簡』¹⁶⁸ は、ハイデルベルクにあるリュースィアースの羊皮紙写本があらゆる爾余のリュースィアース写本の基根となる古写本であることを立証したし、ラッハマン¹⁶⁹ は彼の有名なルクレーティウスについての注釈書¹⁷⁰ において、ルクレーティウスの写本は9世紀にまだ存在していたサンプルから由来しなければならず、そのサンプルの性質はかなり正確に確定され得ることを示している。他の著作において、写本と古い印刷本は、その各々がある共通の起源を持っているグループに秩序づけられる。もしあらゆる

¹⁶⁶ J. Alberto Burer (生没不詳)。

¹⁶⁷ ベークがここで「読み方の多様性」と言っているのは、要するに *varia lectio* ないし *variae lectiones*、つまり「異文」「異本」「異解」のこと。

¹⁶⁸ Hermann Sauppe, *Epistola critica ad Godofredum Hermannum* (Leipzig: Weidmann, 1841)。

¹⁶⁹ Karl Lachmann (1793-1851)。ドイツの古典学者・ゲルマン学者。ベルリン大学におけるベークの同僚。レッシング全集の編集者としても知られている。

¹⁷⁰ Karl Lachmann, *T. Lucrtii Cari de rerum natura libri sex* (Berlin: Reimer, 1850)。

資料を比較した際に、そのようなグループのなかに、重要でかつ外的影響によっては説明できない読み方の多様性が示されるとすれば、この多様性が偶然に成立したということはあるようになく、したがってひとはその多様性がさまざまなテキストの校訂に遡るかどうか、突きとめる必要がある。実際、このような作業は少なからぬ場合に首尾好く進む。かくしてギリシアの古典的作家の場合、ビザンツ流の校正(Diorthosen)、とりわけデーメトリオス・トリクリニオスのそれは、容易に立証され得るので、他方でひとは注釈と頻用の助けを借りて、すぐれたアレクサンドリア流の校訂にまで、それどころか著者自身の時代にまで、遡って推論することができる。写本がより確かな古い引用とたびたび一致するとすれば、そのことによってそれらの写本の源となっている校訂が、古いものであることが証明されるので、ここではそのような遡源的推論がとくに重要である。

ひとは読み方の多様性のなかにそのようにして系譜学的連関を探ることによって、意図的に生じたもともとのテキストの変更を選別することに成功する。いまやひとはもはや個々の異文をそれ自体から判断するのではなく、むしろ批判が体系的になるのである。一挙に広い眺望が開け、そして判断は同時に異文の全体に及ぶ。なぜならば、ひとはこれらの異文を1つの原則から、つまり一定の校訂の性格から導き出すからである。より優れた校訂の異文は、多数の写本が別の読み方をしているという理由で、古文書学的により劣っていると証明されたとはもはや見なされない。というのは、もしこれらの写本が1つの家族に属しているとすれば、それらは1つの証拠としてしか数えられないからである。但し、何らかの校訂においてもともとの真正なテキストが見出され得るとは考えてはならない。最古のテキストですら判読による校訂によって歪められている。それにまた、最良の校訂から導き出されるべき写本は、そうであるからといって必ずしも最も正しい異文を含んでいるわけではない。というのは、その校訂が時代の経過のなかで、書き間違いや外的影響によって強く歪められていることがあり得るからである。ひとはそれゆえ、例の系譜学的分類から独立して、外的な正しさの度合いに応じて写本を分類することができる。この目的のため

めに、ひとは明白な紛れもない間違いを可能なかぎり完全に帰納的に推理することによって、各々のものの性格を確定し、その上で比較を通して位階の順位へともらたし、その結果個々の不確かな異文に対して証拠が単純に数え上げられるのではなく、写本の特徴に応じて考量されるようになる。古文書学的批判がそのようなしてテキストの歴史に支えられるとすれば、それは明らかに決して外的基準にのみしたがうのではない。というのは、校訂や写本の分類は、個々の異文の真正性が検査されることによるのみ、規定され得るからである。その際、批判のすべての4つの種類が使用される。それゆえ、単に文法的批判だけではなく、批判のすべての種類がまたテキストの歴史のなかに、その確かな基礎を見出すのである。もしテキストの歴史が仮説や恣意的な普遍化によってではなく、確実に突きとめられた個々の事実から認識されているとすれば、それはそれを判断するために内的な基準が十分でないような、そのような事例に対する確固たる基準を提供するのである¹⁷¹。

II. 歴史的批判 (Historische Kritik)

§ 34. 文法的批判が言語そのものの判断ではないのと同じように、歴史的批判ということで事実の判断が理解されるべきではない。歴史的批判はその本性にしたがえば哲学的であり、そして文献学が古代の再構成にその全体性において従事し、またその際に歴史の哲学と重なり合うとすれば、そのときにかぎって文献学的である。ここではわれわれは、狭義における歴史的批判を、その歴史的諸前提に関する伝承の批判と見なす。歴史的批判は、あらゆる批判の三重の課題にしたがって、以下のことを検査する必要がある。

1) 1つの記念碑が、全体としておよび個別として、歴史的真理と合

¹⁷¹ [原注] テキストの歴史を確定する際の方法の手本は、ピンダロスの詩の § 15-39 の批判的取扱いに関する論文を参照(『小品集』第5巻, 286-371頁)。

致しているかどうか、

2) もし合致していない場合には、何がより適切であるであろうか、

3) 何が原初的なものであるのか

資料のそのような判断のなかに、明らかにまた歴史研究者の批判的機能が存している。そしてこの批判的機能は、したがってこちらの側で、一種の文献学的批判を形づくっている。

歴史的批判の方法をここでより厳密に叙述することは不必要である。その進め方は文法的批判の場合と同一であり、したがってひとは文法的批判に対して提起された規範と、上で歴史的解釈に関して述べられたことを、結び合わせるだけでよい。まさにいま述べた課題の第3のものに関して、二三の所見をのみ付け加えておこう。

歴史的に適切なものやあるいは不適切なものが、真正で原初的であるかどうかは、作家の個性からのみ判断され得る。作家が歴史的な歪曲をする能力があるかどうか、そして歴史的な歪曲が彼の目的のなかにあり得たかどうか、ひとは調べなければならない。ぞんざいさ、恐れ、お世辞などから、正確な叙述がしばしば意図的に避けられる。語り手にとって、とりわけしばしば厳粛な歴史的真理は重要ではなく、そして彼の判断は往々にして党派的情熱によって曇らされている。とくに難しいのは、詩的な創造物において、どの程度歴史的真理との一致をあてにすることが許されるかを、見分けることである。さらに、あらゆる歴史的叙述においては、著者がその報告をどこから得たのか、また著者自身が資料に対していかなる批判を適用したかが問題である。多くの場合に、記憶の間違いが歴史的な不正確さの原因である。上の〔原典の〕119頁以下を参照されたい。

しかしあらゆる解釈学的洞察によれば、伝承されたものが真正ではないような場合、そこでは批判はふたたび、間違いが原資料の外的破壊、筆者の過ち、あるいは意図的な挿入によって説明されるべきかどうかを、見分ける必要があるであろう。それゆえ、ここで資料の古文書学的判断が入ってくる。固有名詞や数字はとくに高い度合いにおいて歪曲に晒されている。名前は似たものと、あるいは普通名詞と取り間違えられるが、それはしば

しばしば短縮の結果である。もし名前が読めないとか、あるいは何らかの原因で破壊されているとすれば、それらは容易に造作なく省かれるか、あるいは間違っただけで補完される。数字を記入する際の過ちは、数字の取り違え、配置換え、省略を別にすれば、古い言語においてはとくに頻繁に、文字が数字と見なされたり、あるいは逆に数字が文字と見なされたりすることによって生じる。ギリシア語においては、数を表す古い記号(Ι, ΙΙ, Γなど)が、あるいは文字から作り上げられ、同様に非常に古い時代に用いられていた記号が、校訂の際に基礎づけられる必要があるかどうか、さらに調べられなければならない。文字で記された数字の腐敗は、それらが古くは数字で記されていたが、こうした形式において生じた間違いがのちの時代の綴り方のなかに運び込まれた、ということによってのみ説明がつくことが稀でない。真正なるものの回復は、最も微細な個別の事項に立ち入った歴史の知識に、個人史の知識にすらも基づかねばならず、同時に言語、著作家の個性、および書物のジャンルの性格を顧慮しなければならない。歴史的批判はそれゆえ爾余の種類の批判と分かちがたく結びついており、それによってふたたびまたそこから、歴史研究と文献学は同一であることが示される(原著10頁参照)。しかし歴史的批判の校訂は通常は文法的批判よりもより大規模かつ困難である。それゆえ、単に可能的なものが必然的であるかのように思われないようにするために、ひとは歴史的批判をする際に非常に入念にその蓋然性の度合いを見分けなければならない。ときには2つの可能性は、同じくらい確固たる根拠に支えられているがゆえに、同じほど蓋然的である。ここではしばしば文法的批判の助けを借りて1つの仲介を見出すことが、歴史的批判の課題である。例えば、最初のイーオニアの部族の名前は、Γελέοντες〔ゲレオンテス〕とΤελέοντες〔テレオンテス〕という形が同じほど確かに伝承されている。これは両方ともΓτελέοντες〔グテレオンテス〕という形から発展したので、両方とも正しいということから説明がつく事例である¹⁷²。

いかなる種類の批判も多かれ少なかれ結合的であるにもかかわらず、まさに歴史的なものの顧慮のなかには次のような一定の点が存在する。すな

わち、そこでは真なるものをつきとめることがまったく1つの結合にのみ基づいているような一定の点である。なぜならば、1つの事実はこのような結合からのみ回復されるが、この事実は証拠による立証の道ではもはや突きとめられることができない。にもかかわらず、この事実はこの結合が強いものを洞察できる芸術を解する人にとっては、しかしこうした人にとってのみではあるが、完全な明証性を有するからである。このような批判はおそらく最も難しいものであるが、しかし同時に、それに相応しい慎重さをもってなされるときには、最も実り豊かなものである。最も難しいというのは、諸々の事情に精通していなければならないからである。最も実り豊かであるというのは、他のいかなる道を通っても到達され得ないものが、それによって生み出されるからである。結果が重要であるか重要でないかは、この活動にとってはどうでもよいことであり、また必ずしも評価され得るものでもない。誰にでもその持ち分が一番明瞭であるので、わたしは二三の例を挙げてみたいと思う。『ギリシア碑文集成』No.105には、Ἰσαχαραν Ἀγαθωνος [オーサカラス・アガトーン] と出てくる。わたしはその箇所古文書学的な助けをあまり借りずに、このアサンドロスという語はその他のところでは一度も現れないとしても、Ἰσαχαρανの代わりに Ἰασανδρον と記されるべきである、ということ指摘した。結合がそれを証明するのである。つまりオリュンピア暦年116年の第3年〔紀元前314年〕、当時で船団と兵士を引き連れてアテーナイにやって来た統治者のために、碑文がアテーナイで起草されている。しかし〔シケリアーの〕ディオドロスによれば¹⁷³、(オリュンピア暦年116年の第4年〔紀元前313年〕、いかなる置き換えもなしに)アガトーン¹⁷⁴の弟であり、マケドニア人であ

¹⁷² [原注] 1812年の講義カタログの「アッティカの部族について」De tribubus Atticis (『小品集』第4巻, 51頁以下) 参照。

¹⁷³ Diodorus Siculus, *Bibliotheca Historica*, Books XIX, Chap. 75, 1-2. Cf. Books XIX, 68, 5.

¹⁷⁴ Agathon, Ἀγάθων (生没不詳)。但し、有名なアテーナイの悲劇詩人のアガ

るアサンドロスは、エウボイア¹⁷⁵でアテーナイから援助を得た。このいわゆるオーサカラスは彼の甥、つまりアガトーンの子息であって、そして彼はアテーナイの援軍とともにおじのためにやって来たのであった。彼はそれゆえオーサカラスという名前ではなく、彼のおじに倣ってアサンドロスという名前を持っている。一族はデーメートリオス・ポリオルケーテース¹⁷⁶の父であるアンティゴノス¹⁷⁷と戦争状態にあったが、デーメートリオス・ポリオルケーテースは、オリュンピア暦年118年の第3年〔紀元前306年〕、アテーナイに慈善を施している。したがって、校訂の確証のために役立つこと、つまり碑文での名前は知られないようにされたのである。ここでは批判の種類を暗示しているにすぎず、事柄そのものを詳しく解説するつもりはないので、詳細は自分自身で読み直していただきたい。ちなみに事柄そのものは完全にたしかである。そのようにして到達される利益は、われわれがあのように校訂された碑文によっていまやはじめて完全に把握できる、状況に対するよりすぐれた洞察である。そのほかに、ひとはオーサカラスという名前によってマケドニアの言語にとって収穫を得たと信じていたが、われわれは正真正銘のギリシア語の Ἰασανδρον が根底に存在すると見なす一方で、オーサカラスという名前を振り捨てるのである。そのような歴史的結合においては、論拠の立て方が重要である。これを洞

(c.BC 447-BC 401) とは明らかに別人物。

¹⁷⁵ エウボイアとはギリシア中部の東岸に隣接する島のこと。エーゲ海ではクレタ島に次いで大きく、面積は約 3654 km²。

¹⁷⁶ Demetrios Poliorketes, Δημήτριος Πολιορκητής (c.BC 336-BC 283)。デーメートリオス1世。アンティゴノス朝マケドニアの王。アンティゴノス1世の子。

¹⁷⁷ Antigonos, Ἀντίγονος (c.BC 382-c.BC 301)。アンティゴノス1世。アンティゴノス朝マケドニア王国の創設者。アンティゴノスはギリシア人に対しては自由と自治を保障し、息子デーメートリオス1世を送ってアテーナイを占領させ (BC 307)、その地で息子とともに「救世主」Soter として崇拜された。

察できない人にとっては、それはいかなる証明力ももたない。ブットマンはまさにいま述べた事例について、批判は完全に確かであるがそれを洞察する人はわずかである、と述べた。